

第二編

歌人俊賴の研究

第一章 散木奇歌集論考

第一節 歌集名とその成立

白河法皇の院宣によつて勅撰集「金葉集」

を撰進したことは、俊頼にとつては屈期的な

編纂事業であつた。すでに齡七旬を越えた俊

頼に致人としての不動の地位を与えたことは

いうまでもないが、俊頼にはまだ大きな仕事

が残っていた。金葉集時代の革新歌人として
各種の歌合に出席して提出した作品はもとよ
りであるが、その他彼の折々に詠みのこした
歌の数も相当な数になつていたがそれをまと
めた彼自身の家集をまだ持つていなかつたの
である。歌論書としてはすでに永久三年（61オ）
に「俊頼髓腦」を完成させているが、彼みず
からの歌集は多忙な身辺にあつて遂にまだ編
纂の余裕がなかつた。金葉集三奏本もようや
くなり、やつと自己の家集編纂のことを考え

企画実践に移す時が来た。かくして成立を
 みたのが「散木奇歌集」全十巻であつた。畧
 して「散木集」ともいう。
 さて、歌集名となつた「散木」については
 村上忠順の「散木奇譚集標註」に莊子から由
 来することを述べている。即ち、
 「莊子云匠石之者至乎曲轅。見樅社樹匠伯不顧
 遂行不輟。弟子厭觀之走。及匠石曰未嘗見
 材如此其美也。先生不肯視行不輟。何耶曰
 已矣。勿言之散木也。是不材之木也。無所

忠順はさうに「	れは奇にも通ずる。	きことを褒めているのである。してみるとそ	其美也。」と言っている如く、その材の珍らし	ころが又一方、匠石の弟子は「未嘗見材如此	足らざる木のことを意味するものである。」と	とある匠石の詞を引用したものであり、用に	た「散木」とは、「是不材之本也。無所可用	と註している。これによると、家集名となつ	「可用。故能若是之寿而幾死之散人又悪知散木。」
---------	-----------	----------------------	-----------------------	----------------------	-----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-------------------------

を散木奇歌集と名づけられたり。此散木とは、
 無用なる木の事也。莊子にみえたり。これに
 よりて謙遜して名づけられし也。いはゆる散
 位散人などみなこの心也。とこれをまとめて
 自己の解釈を施しているのである。
 次に、本家集の書名は大部分は「散木奇歌
 集」とあるが、一方には「散木奇歌集」(小
 沢本は「散木奇歌集」とある)とある本が
 ある。「奇」を採用したのは、契沖・岡本保孝
 ・村上忠順を始め近代では西下経一・岡田希

い	俊	残	こ	如	い	人	讓	れ	雄
か	頼	る	と	く	こ	違	の	る	等
。	の	の	が	、	は	の	意	通	で
「	志	で	俊	果	す	一	に	り	あ
金	向	あ	頼	た	で	致	と	。	る
葉	す	る	の	し	た	し	つ	。	。
集	る	。	本	て	た	た	つ	。	。
し	新	。	旨	謙	解	解	て	。	。
と	奇	。	で	遜	釈	で	い	。	。
名	が	。	あ	の	あ	あ	る	。	。
づ	含	。	つ	意	つ	つ	の	。	。
け	ま	。	た	味	た	。	が	。	。
た	れ	。	か	に	。	。	こ	。	。
俊	て	。	ど	「	こ	。	の	。	。
頼	い	。	う	弃	の	。	字	。	。
の	る	。	か	し	書	。	を	。	。
命	の	。	は	を	名	。	用	。	。
名	で	。	は	用	に	。	い	。	。
法	は	。	同	い	つ	。	て	。	。
の	な	。	題	る	。	。	い	。	。
		。	が				る	。	。
								。	。
									。

（注・「散木奇歌集の研究と校本」32頁）

意識の底には俊頼の自負心があつたと思われ
 るし、それと同様に自己の歌集の命名には尚
 更ら、自負心をこめた誇りも以て臨んだと解
 釈してもよいのではないか。人間的に謙讓深
 い俊頼であつたことは歌合の判詞などからも
 容易に推測はされるが、歌人としての俊頼に
 は自信に満ちた力を自負していたと思われる
 。そういう意味から「散木」にしても「奇」
 にしても「た」
 ただ消極的に「無用にして棄て去る歌」と解
 するよりも、「もつと前向きの姿勢で」「有用に

して且つ新奇な致^しといふ誇りを以て彼自身の
作品の特殊性を誇示したものと解したので
ある。諸本の系統の面からも「散本奇致集^し
とする南根慶子説に筆者も従いたい。
散本集の編述はその特異な名称の付け方か
らみておそらく俊頼自身がつけたものである
う。若し他人の編になつたものとしたならば
たとえば「源俊頼家集^し」といふ如き極めて平
凡な名になつたに違いない。

く	に	の		○	る	く	雑	る	
て	は	一	も	な	と	よ	下	べ	散
書	「	首	世	い	し	ろ	の	き	木
き	金	が	に	そ	て	づ	最	も	集
つ	葉	あ	む	ぢ		に	尾	の	の
け	集	る	も	に		「	に	成	成
侍	の	。〃	れ	み		年	〃	立	立
り	の	な	ぬ	ち		七	年	に	に
け	奥	お	る	ぬ		十	十	つ	つ
る	に	こ	か	る		に	に	い	い
し	御	の	な	し		な	な	て	て
と	覧	款		ほ		る	い	は	は
詞	じ	は		の		ま	が	確	確
書	あ	散		染		で	金	か	か
を	は	木		ひ		つ	葉	な	な
改	れ	集		さ		か	集	資	資
め	べ	の		ぎ		さ	二	料	料
て	と	雑		ぎ		も	度	と	と
載	お	九		え		な	本	な	な
せ	ぼ			し					
	し			く					

ている。但し三奏本にはこの款はないのだが
ら少なくとも二度本撰述以後に於て散本集は
成立している。とみてよい。しかし、一方に於
ては「金葉集」の編集に尽力している俊頼で
あるからこの間に膨大な家集が完成したとは
考えられない。自家集をまとめた希望と構
想は、むしろ持つていたに違いないが、その
成立は三奏本の撰進を完了した大治二年（73才）
以後没年大治四年の間に成立したものである
う。俊頼の没年については「中右記」大治四

年十二月一日の條に

「天晴、御八講有豎義、山階寺豎教縁故俊頼孫云々

といふ記事があるので十二月一日以前にはす

でに物故してゐることが知られる。

教縁は、尊卑令脈によると、



とあり、俊頼の子俊重の二男であり、後に大

僧正興福寺別当になつた人である。「永縁

奈良房歌合」に於ける教縁の歌はすべて俊頼

奈良房歌合」に於ける教縁の歌はすべて俊頼

が代作をしている。俊頼七十一才の時、金葉集二度本を奏上したのも同じ年で天治二年のことである。翌大治元年には俊頼最後の「摂政左大臣家（忠通）歌合」に判者、作者として出席。金葉集三奏本もこの年か翌二年には奏覧の運びになっており、かなり多忙な俊頼の最晩期であった。「史料綜覧」・「讀史備考」（忌日索引）には俊頼没を大治四年十一月としていっている。これは先述の「中右記」の十二月一日の記事が根拠となっていていられるらしく

おそろく大治三年にその成立をみて翌四年には自分の手であんだ散木集をみてこの年七十五才の生涯を閉じたものと思われる。

さて、散木集の内容十巻は整然とした部立組織を十部に分かつている。ことに勅撰集にならいつりも四季の各部を更に三ヶ月に区切つて細分しているところに特色がある。即ち

第一	春部	正月・二月・三月
第二	夏部	四月・五月・六月

		第十	第九	第八	第七	第六	第五	第四	第三		
		雜部下	雜部	恋部下	恋部上	悲歎部	祝部	冬部	秋部		
							・別離	~~~~~	~~~~~		
		長歌				・神祇	・旅宿	十月	七月		
		・旋頭歌				・秋教部	(羈旅)	・十一月	・八月		
		・混本歌						・十二月	・九月		
		・折									
		句歌									
		・省冠折句歌									
		・隱題									
		・									
		連歌									

という部立組織である。

ここでも部立上の肉題点を考えてみると、茅

五における別離と旅宿は勅撰集では「離別」

（散木集では「別離」と逆になつており、旅

宿は普通「羈旅」とあるべきである。）

この事については南根博士がすでにふれて

いる様に写本でも本文価値の少ない神宮文庫

本（乙本）、小沢本、岸本文は凡て「羈旅部」

とある。一般の他の歌集の部立名も大抵この

「羈旅」の名を用いてゐるのに散木集の現存

写本では「旅宿^L」としていているのが多いところ
 から原本としてはこの新しい名の「旅宿^L」を俊
 頼も用いたのではないだろうか。この事は例
 えば他の部立名の場合でも言える。即ち、徒
 末多くは「賀^L」であるべきところを俊頼は「
 祝^L」を用いている如きである。第六に於ても普
 通は「哀傷^L」を用いているのを「悲歎部^L」と
 徒末にみられたい新しい命名法を用いている
 如きもそうである。また、雑部を上・下に分
 けて下の方に長歌以下歌体別に六種に分かち、

さらに「連歌」をここに配置させたことは他の家集に見られない散木集独特の編集方針といふべきである。但し、散木集の諸本間においては細部に異同がある。それを次に示すと(1)、間宮本に校しているイ本のみ「別離」に「之部」を附す。(2)、神宮文庫本(乙本)、小沢蘆庵本、岸本由豆流本の三本のみ「神祇」に「部」を附す。(3)、の三本と、刊本のみ「釈教」に「部」

かく	対	以			部	と		
く	し	外	(4)	(2)	L	い	(4)	
考	て	に	に	・	は	う	類	を
え	あ	は	に	(3)	現	こ	従	附
て	る	存	に	に	存	と	本	す
く	の	し	に	に	本	に	に	。
る	が	て	に	に	の	な	に	
と	か	い	に	に	中	い	に	
こ	正	る	L	L	に	い	に	
れ	し	の	に	L	は	。	に	
ら	い	で	つ	L	附	(に	
の	。	こ	い	L	し	雑	雑	
部		れ	て	L	た	部	部	
・		は	は	L	も	L	L	
之		雑	上	L	の	は	に	
部		部	L	L	は	な	上	
L		下	が	L	お	い	L	
は		L	類	L	け	る	致	
後		L	従	L	る	L	一	
人		L	本	L	。	L	致	

が附したものであること、これがわかり、これらを除くことにより純粋な俊頼自身のたてた部立名の構想が出来あがる。すなわち、各巻の初巻のみに「部」がつくという極めて整然たる部立になるのである。

以上、俊頼の散木集編纂に当つての外形的構想の部立構造について述べてきたが、俊頼は勅撰集の規範に依據しつゝもこれを自家集十巻の中に圧縮して彼自身の考えに基づいて編纂したのである。次にはさらに進みその内

部の具体的編纂の部立意識について考えてゆ
きたい。

第二節 散木集編纂の部立意識

散木集の總歌数 1619 首（重出歌三首を除く。）
の膨大な数をもつ歌集を編纂するに当たつて
いかなる部立をたて、作品を配直するかとい
うことは、歌人俊賴の撰歌意識の統一とい
うことにならざる問題である。

部立構成の意識はすでに「古今集」に勅撰集としての規範が示されている。まず、四季から始まり種々歌の詠まれる対象の雑多な変化に伴ないその部立を決めてゆくという方法である。四季に対する人間の感覚は季節の推移により漸次時間的に展開されてゆく。このことはひとり歌人のみならず、物語、随筆、日記の作者たちも等しく持つていたもので、その端的な表現は枕草子が四季の叙述から始まり、さらに各季のもつ行事などの細叙に発

展してゆくことによくうかがえるのである。
このよくな四季折々に對する美的感覺は毎
年くり返される日本風土の特色に對する民族
の生活感情でもあつた。
こうした生活感情が叙情詩たる和歌の世界
と結びつき、それが歌集編纂の部立として定
着していつたことは當然な帰結であつた。こ
の事を復頼は「復頼髓」の中に「歌の題」
のことと關係させて「大方歌をよまむには題
をよく心得べきなり」から始まり、詳細にそ

の例をあげて叙している。

「例へば、春のあしたにいつしかとよまむ

と思はば、佐保の山に霞の衣をかけつれば

、春の風にふきほころはせ、峯のこず急を

へだてつれば、心やりてあくがらせ、梅の

にほひにつけて、鶯をさそひ、子日の松につ

けても心のひくかたならばちとせをすごさ

む事を思ひ、若菜をかたみにつみためても

心ざしの程をみえ、残りの雪の消えうせぬ

るに、我身のはかなき事をなげき、……しと

これは春の景物を題として詠むべきことを示したものでまだ次々に春の主題についでのは長々とつづく。以下俊頼は四季折々の景物、さらにその景物についての抒情の在り方も及んでいるのである。この考えはその弟子俊成の「古来風体抄」の中にも継承された。俊頼髓脳^レに述べられた景物主題はそのまゝ俊頼の散木集^レ編纂の上に実は具体化されていゝることを忘れてはならない。今、散木集の主題を抜き出してみると次の如くなる。

以上のよ^うな自然の景物は四季推移に伴な
う詠歌の重要な主題を形成する。

散木集に於て四季を十二等分に月割し、さ
らにこれを四等分に春夏秋冬に区分してゐる

方法は「相模集」^Lや「曾根好忠家集」^L（曾丹集）

などにその例が見えてゐる。その一覽表を示
すと次の通り。

八月		七月		六月		五月		四月		三月		二月		正月		月別集
なかの秋		はつ秋		はての夏		中夏		夏の始め		はての春		仲春		始めの春		相模集
八月上		秋(序歌) 初の秋		六月初		夏中(五月初)		夏(序歌) (四月初)		暮の春(三月初)		中の春(二月初)		春のはじめ		曾祢好忠集 (毎月集)
八月中		七月中		六月中		五月中		四月中		三月中		二月中		正月中		
八月終		七月終		六月終		五月はて		四月終		三月終		二月終		正月終		

<p>「好忠集」は十二ヶ月に分けた上、さらに一ヶ月</p>	<p>考えている。</p>	<p>はじめ・「なか」・「はて」の三等分にし季の推移を</p>	<p>十二ヶ月を四季にわけ、さらにその一己分を「</p>	<p>以上兩集の分け方をみると、「相模集」の方は</p>		<p>十二月 はての冬</p>	<p>十一月 なかの冬</p>	<p>十月 冬のはじめ</p>	<p>九月 はての秋</p>
						<p>暮の冬(十二月初)</p>	<p>中の冬(十月上)</p>	<p>冬<small>(序歌アリ)</small>のはじめ(十月)</p>	<p>九月上</p>
						<p>十二月中</p>	<p>十一月中</p>	<p>十月中</p>	<p>九月中</p>
						<p>十二月終</p>	<p>十一月終</p>	<p>十月はて</p>	<p>九月終</p>

月を「初」(上)。「中」。「終」(はて)に細分し、各部分に十首の歌を配していろのみでなく四季の巻頭にはいずれも長歌(反歌一首あり)があるという風に整然とした構成をなしている。俊頼はこの兩集の如く細分はしていないが一年を四季別に四等分(三ヶ月を一つの季の単位とする方法)にする考えは同じであり、俊頼の意識の底にはやはり好忠や相模の如く四季の推移の中に細分した景物を歌の主題として把握する方法をとったのである。

春				部 月	様な表が出来あがる。 数の多寡などと比較しつゝ考えたりゆく。次の ように具体的に排列されていくか。これを歌 次に「散本集」における四季の主題がどの
霞	鏡	立 春	元 日	正 月	
14	3	1	1	歌数	
散 る 櫻	咲 く 櫻	咲きそめる 櫻	咲かざる 櫻	二 月	
28	50	1	1	歌数	
早 蕨	帰 雁	桃 の 花	三月三日の心	三 月	
1	3	1	3	歌数	

部

柳	梅	鶯	余	春	粥	駒	卵	若	子
			寒	雪			杖	菜	の
									日

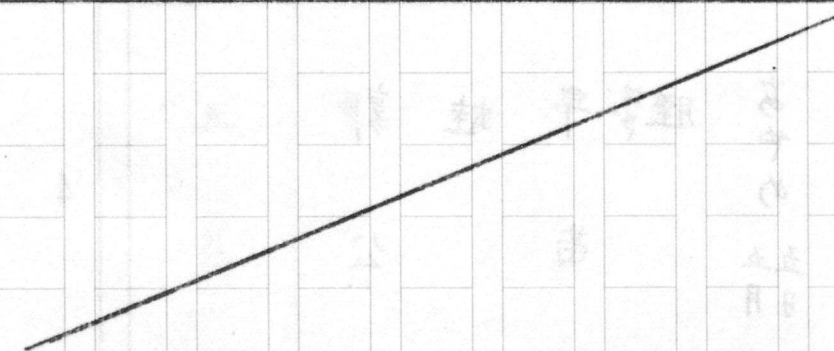
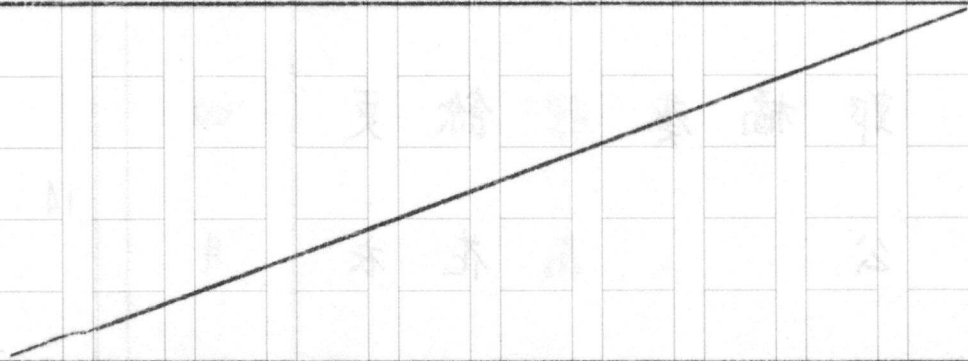
3	10	9	1	3	1	1	3	5	5
---	----	---	---	---	---	---	---	---	---

三	残	山	藤	山	雉	苗	か	す	春
月		梨	の	吹			き	み	
尽	櫻	の	花	子	代	つ	つ	れ	駒
		花				ば	ば		
						た			

8	1	1	7	9	3	1	1	2	3
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

夏							部 / 月	主題
	郭	橘	葵	卯	餘	更	四	
	公			花	花	衣	月	14
	5	2	2	12	3	1	歌 数	60
螢	五 月 雨	あ や め 五 五 日 月	脛 <small>はか</small>	早 苗	蛙	郭 公	五 月	4
4	9	9	1	4	2	56	歌 数	80
竹 風 如 秋	晚 風 如 秋	撫 子	夏 虫	夏 月	夏 日 越 南	水 風 晚 涼	六 月	14
1	1	4	1	7	1	1	歌 数	44

部



照と
も
射し

2

秋	夕	水く	蚊	夕	蟬	風	氷	泉	避
節	類	子 鶏な	遣 火	立			室		暑

1 1 5 4 2 3 2 3 6 1

主 題	部								
6	夏								
25	夏								
8	夏								
87	夏								
26	六 月 被	葦 廬	木 蔭	一 夏 風	蓮 花	螢	水 風 如 秋	鵝 川	夏 草
58	2	1	1	1	2	1	1	4	1

				秋				部	月
		七	萩	残	晚風告秋	夕	立	七	月
		夕		暑		風	秋		
		12	3	1	2	1	1	歌	数
蘭	鬼のしこ草	薄	萩	女郎花	露	刈	野	八	月
						萱	花		
2	1	5	10	7	1	2	3	歌	数
女郎花	きりぎりす	紅葉	柿の実	秋の夜長	秋の夕暮	菊	月	九	月
1	1	9	1	1	1	9	37	歌	数

部

部									
(A diagonal line is drawn from the top-left to the bottom-right of this section.)									
鹿	露	風 (山嵐)	朝 顔	露 草	雁	虫 の 声	松 虫	す い む し	き り ぎ り す
17	3	2	1	1	5	3	1	1	2
(A diagonal line is drawn from the top-left to the bottom-right of this section.)							九 月 尽	秋 の く れ	虫 の 声
							3	1	1

	主 題	部						秋
	6	/						
	20							
	25	月	夕 づ く 夜	夕 風	山 田	持 衣	駒 迎	霧
	III	24	1	1	4	3	3	8
	II	/						
	65							

								部 月	
冬									
	網	ひづち	嵐	落	紅	時	初	十	
	代	田		葉	葉	雨	冬	月	
	6	1	2	14	5	11	1	歌	教
臨時祭	神	五	蘆(蘆火)	千	野徑寒草	鷹	山里住み	十一	
	楽	節		鳥		狩		月	
	1	1	2	5	1	7	1	歌	教
衾	月	日光映水	水	みぞれ	霰	山家風	埋	十二	
			鳥	れ			火	月	
	1	3	1	4	1	2	1	歌	教

主 題		部				
7	/					
40	/					
8	/					
19	/					
13	歳 暮	雪	氷	山 家 冬 閑	炭 か ま	
54	8	23	6	1	2	

計	冬の部	秋の部	夏の部	春の部	部
百四十二	二十八	四十二	四十	三十二	主題
663首	113首	196首	170首	184首	歌数

る。

配列された歌数を整理してみると次の様にな

以上の表から四季の主題（景物）とそれに

この表で明らかかな様に主題・歌数ともに最も多いのは秋の部である。これは四季の中で秋という季節が主題になる景物を最も多く有して、いることを物語るものである。さらにその主題の内容をみると秋では「月」の主題に対する歌数が61首で最も多い。月の主題は八月の最後と九月の最初に連続的にまたがって配置する編集によつたためと景物そのものから言つても歌の対象に最もなりやすいためによるものである。(月の歌数は八月24首・九月37

主題に配置した編集方針をとつているのは俊
 いう如く時間の推移によつて同じ櫻を四つの
 (1首)。(3)咲く櫻(50首)。(4)散る櫻(28首)と
 この櫻を(1)咲かざる櫻(1首)。(2)咲きそめる櫻
 櫻のみである。正しくは景物は一つであるが
 題が全く同じの十四。ところが二月の主題は
 る。その内容を見てみると、正月と三月の主
 その次に歌数の多いのは春の部の184首であ
 順である。以下畧。
 首収録)次が鹿(17首)・七夕(12首)・萩(10首)の

頼の巧みな主題に対する構成手法といふべきである。

「夏の部」の主題景物は「春の部」より多く四十を数えるがその歌数は170首で少ない。夏の主題

で歌数の最も多いのは「郭公」の61首。(これ

も四月の最後(5首)と五月の最初(56首)

に連続的にまたがって配置している)次が「卯

花」の12首。その他は凡て十首以下で一主題に対

して一首と云うのがかなり多い。つまり、主

題は多いがそれを詠んだ歌が少ないといふの

が「夏の部」の特色である。

「冬の部」の主題は二十八で歌数が113首。四季のうちで主題も歌数も最も少ない。主題のうちわけは十二月（十三）・十一月（八）・十月

（七）の順で歌数から云えば同じく十二月の54首が最も多く次が十月の40首で十一月の19首が最も少ない。十二月の歌数の多いのは冬の主題景物として「雪」23首があつたためで十月が主題の少ないのに十一月よりも歌数の多かつたのは、「時雨」（11首）・「落葉」（14首）と

季節の景物歌が多かつたためである。十一月の主題歌の数の多かつたのは「鷹狩」7首で、多いと云つても遂に10首を超えに至らず千鳥^レの歌が5首ぐらゐのもので他はいずれも一主題に対し二首、一首と云うことで全体の歌数が伸びなかつたためであつた。

以上四季の部の歌についてその主題と歌数の配列関係の実態をみてきた。そこには俊頼のゆき屈いた緻密な編集ぶりが窺われる。勅撰集たる金葉集より自由な主題配列が試みら

第三節 散木集の伝本考

散木集の諸本については、肉根慶子博士の「散木奇欵集の研究と校本」^L（昭和廿七年・明治図書出版株式会社刊）の中にその勝れた論考を発表している。

この第三節に於ては同氏の学思をうけつゝ、なお筆者自身もそれをたしかめ、新たな資料も加えて以下整理してみたいと思ふ。

散木集の伝本について現在知られてゐるもの

のは刊本三本、寫本三十本以上ある。次にこ

れらの性質を検討してみよう。

(一) 刊本

(1) 群書類従本（十巻本）
散木奇歌集

この奥書には「右散木奇歌集以織部正乘尹

本校合了」とある。但し織部本は現在みあた

らないので如何なるものか不明。原本も判明

しない。本書は類従本として一般に流布した
ものであるが、字句の誤脱などが多く他の本
を以て補うべきところが多い。

(2) 校註国歌大系本（十巻本）「散木奇歌集」

その例言に「竹柏園蔵佐々木弘綱翁稿本（藤
尾景年・伴林光中書入）を底本とし、顯昭法橋
の散木集注を参照」とあり、奥書は類従本と
全く同じである。ここにいう「竹柏園蔵散木

奇歌集^Lは十卷三冊本で、佐々木弘綱公翁の書寫
 にかゝるものであり、翁が「標注散木奇歌集
 俚言解^L」の著述に志した時にその本文を類徒
 本で書寫したものの。徒つて本文は脱落など全
 く類徒本と一致している。かゝる意味から因
 歌大系本は類徒本から發していることになる
 のである。

(3)

散木奇歌集標注（十卷四冊本）

（内閣文庫所蔵）

本書は村上忠順（刈谷藩主土井氏の藩医・国学者・文化九年（1812）—明治十七年（1884）・73才没）が散木集の考證と詞の心を注解するため執筆したもので序によると「嘉永三年庚戌正月」とある。はたしてこの記載通りに成立を考えると、[○]良いかどうかについては実は問題がある。というのは筆者が俊頼肉係の調査に刈谷図書館の村上文庫を訪れた際、全文庫所蔵に寫本「散木弁歌集」二本（三冊本と四冊本）があり、三冊本の方には同じく序があり、この序

を刊本の序と比較してみるとかなり相違して
 いる。この三冊本の序は初稿であつて、それ
 が刊本の序になるまでにはかなり訂正された
 ものと思われる。たまたま／＼筆者の研究調査の
 途中、築瀬一雄氏が『散本并致集標註』の成
 立しなる論文を發表され、（「国語と国文学」氏
昭和四十年八月号）の精緻な論考に接し大いに裨益される学恩に
 浴することを得た。要は本書の成立が従来考
 えられていた刊本の序の年記嘉永三年度戌（1850）より
 十年後の万延元年（1860）仲春以降と認められる資

料の存してゐるといふ事実は明らかになされた
のである。すなわち、村上家所蔵の「蓬廬禠
鈔」(蓬廬とは忠順の号)に収められてゐる「
散木弁歌集標註序」が二通あり、いずれも忠
順が散木集研究について松本奎堂(刈谷藩の
志士)にその批評を求めたるために書いた序であ
り、しかもこの執筆は再度にわたる奎堂に送
つてゐる。第一回目の稿に対して奎堂は朱筆
を入れ或は削除し、或は補訂し、評言まで加
えて返送してあり、この時の奎堂の年記には

信 卿 ^x 之 子 也	源 俊 頼 朝 臣 是 ^x 大 納 言 経	忠 順
卿 を 削 る	是 を 削 る	奎 堂
2	1	号番

「己未孟秋松本衡妄批」
 六年(1859)にあたる。これを受け取つた忠順は奎
 堂の批正の場所を再考したとは思われるが必ず
 しも全部そのまゝは入れず「伏乞周顧、忠順
 として淨書し、奎堂に再送した。
 その一部を示す。(上段が忠順の初稿、下段
 は奎堂の訂正箇所)

の で あ る。 こ の 外 欄 外 に 例 え ば 7 の 個 所 に は	以 上 の 形 で 奎 堂 は 加 筆 し 訂 正 を 試 み て い る	御 [○] 有 [○] 所 [○] 謂 [○] 能 [○] 乘 [○] 三 [○] 舟 [○] 之 [○] 材 [○]	夫 [○] 朝 [○] 臣 [○]	故 [○] 有 [○] 称 [○] 須 [○] 互 [○] ⋮ ⋮	其 [○] 自 [○] 家 [○] 詠 [○] 訝 [○] 亦 [○] 高 [○] 邁 [○]	而 [○] 撰 [○] 之 [○] 最 [○] 精 [○] 者 [○] 也 [○]	築 [○] 集 [○] 者 [○] 然 [○]	雖 [○] 当 [○] 時 [○] 或 [○] 有 [○] 貶 [○] 議 [○] 而 [○] 名 [○] 肱 [○]	白 [○] 河 [○] 院 [○] 天 [○] 皇 [○]
		御 [○] を [○] 削 [○] り [○] 印 [○] に [○] 納 [○] 言 [○] と [○] す [○] る	夫 [○] を [○] 削 [○] る	印 [○] に [○] 我 [○] 邦 [○] 古 [○] を [○] 補 [○] 入 [○]	其 [○] 自 [○] 所 [○] 詠 [○] と [○] 訂 [○] 正 [○]	也 [○] を [○] 削 [○] る	印 [○] の [○] 個 [○] 所 [○] に [○] 之 [○] を [○] 補 [○] 入 [○] 。 者 [○] 然 [○] を [○] 削 [○] る	印 [○] の [○] 個 [○] 所 [○] に [○] 固 [○] 焉 [○] を [○] 補 [○] 入 [○]	院 [○] を [○] 削 [○] る
		10	9	8	7	6	5	4	3

「自家俚語不宜用之雅文^Lと訂正した理由の
 評語を記入して[○]いる。この評語はそのほか五
 例ある。また奎堂の訂正は全部で23個所の多
 きに及んで[○]いるがこの中忠順は8個所ほど指
 示通りに[○]はうけ入れていない所がある。かく
 して訂正した初稿の出来上ったのが安政六年
 ということになり、忠順が再度の[○]批正を奎堂
 に依頼し、奎堂また再訂し忠順の許に返送さ
 れたのが「庚申仲春辱知松本衡妄言^Lとある
 通り、万延元年二月のことであつた。この時

奎堂の再訂は七個所ほどあり、これらを浄書したのが刊本の序となったものである。刊本の序の年記に「喜永三月庚戌正月」とあるのは三冊本散木集に附された序の第一稿の案文作成の頃を指すのであり、以上述べてきた過程を経て実際「散木弁致集標註」の完成したのは万延元年のことであった。しかし、年記の「喜永三月庚戌正月」は、第一稿の案文作成の頃のまゝに残されていたといふことになるのである。

本書は「第一章・第一節」にも述べた如く
 散木集という命名の由来なども詳しく、顕昭
 の「散木集」が作品の抜粋解釈であるに対し
 全歌の解釈考証という画期的な散木集の研究
 書であつた。忠順が散木弁歌集研究に志した
 のをかりに天保十二年(1841)「散木弁歌集」四冊本
 の奥書による」とすればその完成まで十八年
 間という長い年月を経ており、この間忠順は
 宮々として専心郷里参河国(碧海郡高岡町大
 字堤)に在つて散木集研究に従事していたの

である。

以上「散本弁致集標註」の成立をめぐる内

題につき述べてきた。この事は伝本研究その

ものの内題ではないが忠順の散本集研究につ

いては極めて大切なことでここで一応考える

べき要性を思い述べた次第である。

次に本論に立ち帰つてそれでは忠順は散本

集の研究に当たつてどのような本文を用いて

いたであらうか。この事については同じく「散

本弁致集標註」刊本の「序」及び「
於富無泥」(本

書成立の大要を説明した文）と題するものが
 中に述べている。まず序の方をみると、
 「夫朝臣集亦然。而世間所伝寫本誤脱極多。不
 可識読。頃日幸獲一本。雖非無謬誤。較諸他
 本為愈。於是取其致載在撰集及諸書者。校讐
 之以録異同。」（第一下裏から第二下表の箇所）
 という文がある。ここで忠順は世間流布の寫
 本には該脱の多いことを指摘している。幸い
 にして手に入れた一本も謬誤あり他の諸本と
 校合異同を録したという本文校訂の事にもふ

愈於是取其歌載在撰集及諸書者按讐之以錄異
 同抑此集雖近來翫之者少矣古既有法橋顯昭奉
 梁門教命作之註又袖中鈔載數首釋之且京極中
 納言密勣亦甚賞譽之由此觀之當時珍賞超於它
 集必矣朝臣與法橋世之相去不遠然而梁門有教
 註之者不特以其什之佳且貴其能據用古語也余
 今尋法橋微意爲之標註其不足者加以諸家說補
 以僻案號曰散木弄詠集標註集中之歌有雄偉焉
 有新竒焉清詞妙句縱橫跌宕無所拘泥實可謂歌
 僊耳後世弄歌誤作竒歌亦宜矣後之觀者或據書

散木弄歌集標註序 (第一丁表) (其の一)
 (内閣文庫所藏)

名古屋人野口道直がひめもたる本をかり
 つ三つよみあはせ考ふるうちに尾張ノ國
 まりに群書類徒なるをはじめそのほか二
 も校訂せし本をえてめぐらかにおもふあ
 りしかどもゆくりなく狩谷望之が古本と
 〓おのれこの集を校へ正さむの心はあらざ
 る。
 次に〓於富無泥しをみると左の如き文があ
 たかといふ事についでほ別に語つてはいない。
 れている。但しその入手の一本が何本であつ

とある。(この「ヲ 散木并致集」(三冊本)にも附されており、その内容は刊本と殆ど同じ。署名が忠、万、左とある。)これによると忠順の用いた伝本は、

(1) 狩谷棟喬所蔵の古本を底本として校訂した本を入手した。

(2) 類従本、その他二三本を以て校合した。

(3) 野口道直所蔵本が善本であったのでこれを

をも校合して書き入れた。

(4) ただ田舎に住んでいて書物に乏しく円珠

庵契沖本の入手出来なかつたのが残念で

あつた。

と
い
う
こ
と
に
な
る
の
で
あ
る
。
こ
れ
は
忠
順
の

伝本に對しての校訂作業の経過でもあり、こ

のことは今一つ同じく「散木奇歌集標註」の

「初音」と題する跋文にも書いてある。

「おのれゆくりなく狩谷望之が校へたるう、

つし巻を得て珍らかにおぼえてよみ見ろ

に猫たらはぬ事どもおをかめれば群書類

徒なるをはじめその外三つ四つくらべ見

て缺けたる歎猶もおほかたに補ひ正した

るなり。はじめより此集をと思ひよりた

るにはあらず。……
「初音」57丁裏から四、58丁表へ

とあるのがそれである。

更に狩谷掖斎所蔵の古鈔本を底本としたこ

とについてには「散木弁歎集標註」の奥書（岡

本保孝の識語）によつても明らかである。

「此古鈔本掖斎狩谷先生帳中之物今影照新

寫以蔵干家。惜乎此本缺卷九以下雜部故

以一古鈔本繕寫補入。此藍本亦係先生之

蔵。嗚呼先生徳崇学富諸書亦称焉。保孝
生平浴於先生之徳澤有年於茲子孫其勿忘
諸

天保二年八月廿四日夜况齋岡本保孝於於歲計草堂

とある。(第四冊五十六下)

ところ、この識語は刈谷図書館所蔵の四

冊本「散木弁歌集」にも存している。忠順が散

木集の本文校訂に用いたのはこの寫本であつ

た。この事については、後の寫本の項で述べ

る。

以上のことから忠順は散本集の本文研究に
当たっては狩谷本を底本とし群書類従本を始
めさらに他の諸本をも校訂し、その本文には
校異も記入しているが、忠順本作成の意図も
見えどここまでが狩谷本であるか、その実態に
ついては判明しない。また諸本の名について
も明示を欠いている。本文の内容から類従本
系統に属していることは言えるが、特殊な位
相にあるのが標註本の本文であった。なお、
本刊本についての特色を若干あげてみると、

(一) 本文の奥書に（文献写真・其の五参照）

群書類従二百五十四卷奥書

右散木奇譚集以織部正乘尹本校合了

深見篤慶校読

レ

と記していることである。写本三冊本（こ

の事については後述）と比較してみると三冊

本には「深見篤慶校読」の六字はない。刊本

にこれを特に書き加わえているのは何を意味

するかというところ、深見篤慶というのは、同刊

本の奥附に「京都三条通升屋町・出雲寺文次

郎以下書肆名九人の名を列ね、最後に「参

州新堀・深見藤吉〇とあるこの人を指す。藤
吉は富裕な商人で忠順の女婿篤慶〇のことで、
校読とあるのは刊本を上梓するに当たつて岳
父忠順の散木集研究にかなり協力し、おそら
くその原稿を読み合おした役をなしたものと
思われる。単なる商人ではなく学問研究に
をよせた人であつた。これは忠順の感化にもよる所
が多かつたであらうが、一方経済力もあり、
刊本出版にあつては篤慶の後援に大いに与
かつたものと思われる。

(二)

次には「散木弁評集脱漏歌」(村上忠順補)

として廿九首の脱漏歌を類別して列挙して

いること。内訳は、(1)堀川百首(三首)、(2)

永久四年百首(廿一首)、(3)金葉集(一首)、(4)新

千載集(一首)、(5)新拾遺集(一首)、(6)元永

元年十月内大臣家歌合一番右(一首)、(7)

夫木鈔(七首)である。(文献写真其の六)

ここにも頭注を加えている。

(三) つづいて「古今著聞集」・「続古事談」等

の諸書から俊頼に因する記事の抜書を掲載してゐる。(文献写真・其の七)

(四) 最後に「所載諸書俊頼朝臣歌数」の一覽

表をまとめてゐるのも用意周到を試みとい
うべきである。その内訳は次の通り。(文献
写真・其の八)

金葉集(三十六首)○詞花集(十一首)○千載集

(五十二首)○新古今集(十一首)○新勅撰集(十三首)○

続後撰集(三首)○続古今集(十四首)○続拾遺集(五

首) ○新後撰集(四首) ○玉葉集(七首) ○續千載
 集(六首) ○續後拾遺集(六首) ○風雅集(十
 六首) ○新千載集(五首) ○新拾遺集(六首) ○
 新後拾遺集(三首) ○新續古今集(十二首) ○
 後葉集(十九首) ○續詞花集(十一首) ○雲葉集
 (十七首) ○月詣集(七首) ○万代集(四十首) ○
 夫木集(四百五十五首) 歌林拾葉三十六首) ○類題集(一
 三百九十五首 除重出歌廿三首) ○袖中鈔(四十首) ○明題
 集(百四十一首) ○和訓栞(四十五首) ○古今類句
 (二百十首) (以上諸歌集 28集・歌教 1567首掲出)

新後撰集

四首

玉葉集

七首

續千載集

六首

續後拾遺集

六首

風雅集

十六首

新千載集

五首

新拾遺集

六首

新後拾遺集

三首

新續古今集

十二首

後葉集

十九首

所載諸書俊賴朝臣歌數 (四冊六十六丁裏)

(其の八)

以上の如く「散木并歌集標注」は本文の上
欄には歌に即した極めて広汎な頭注を施し、
その外序、跋、俊頼関係の諸資料など完備し
た刊本で散木集研究書として最も秀れたもの
である。この刊本の成立するまでの経緯につ
いては写本の項に後述するが、ここではその
中、刊行を囲る諸資料について述べておきた
い。こゝの資料もすべて刈谷図書館に所蔵
されている。

(一) 包紙

四冊本（写本）の第一冊の裏見返しに刊本上梓に因する書類が貼付されている。まずその

包紙には「関校伺書

文文二年壬戌八月官許（朱書）

土井大陽字家来

村上承郷とある。

（文献写真其の九）

(二) 別紙に

「標註散本集

四冊

右関校仕度候間此段奉相伺候以上

土井大陽字家来

村上承郷

とある。

四月廿六日

（文献写真其の十）
（正）

(一)・(二)に承^レ卿^ノとあるのは忠順の字である。

(三)、さらに別紙に

「肉极不苦候出来之上^江 尙部学問所 相納可申

尤其節改濟之年月日相認メ差出可申事

戊八月十九日」 (文献写真其の十^上)

この年記戊^ノは(一)と同じく文久二年(1862)。[○]これ

は忠順の伺書に對しての許可書である。

(四)、さらに外に次のような忠順に當てた伊藤

律之助の書簡がある。

「未得貴意候得共益御清適珍重奉存候小

生仙台藩中ニ御座候処年来松本君ト御懇
 意申上居右ニ而御著述上木御願之義御同
 人より御頼ニ而右本右処穴牙敷奎仕候処早
 既数年前之義何程手配仕候而ト相知不申
 候處林家御塾吉田ト申仁之方ニ有之依而
 此度願上申候御上木相成候ハバ尾部聖堂
 ニ御上納可被成候夫而已ニ而宜御座候小
 生当時聖堂書生鞞ハ相返候間此後ニトモ
 御伝遺可被下候匆々頓首
 閏八月廿八日
 伊藤 律之助

村上承弼様

尚以御案内も御座候共上本願濟の外ニ御

書と申も無之蓋紙ニ初巻一冊ハ御改之

判相据候而已ニ御座候何年相過程之義

有之候而も右之御判御願濟之証跡ニ御

座候
（文献写真其のナ）

この書簡の字体甚だ読みにくいところあり

難澁したのであるが大意はつかめる。即ち、

(1) 忠順の「散木集標注」の上梓がはかどら

なかつたため、刈谷の志士松本奎堂（この

ことについて(は写本の項に後述する。)を介

して忠順は伊藤律之助に事の次第を訴えた

(2)、忠順の原稿は林家塾吉田某の所に数年間

空しく滞っていたことが判明した。

(3)、律之助はそこで林家の改済の許可を得て

この事を忠順に報じた。この日付は文久二

年八月廿八日。

以上が伊藤律之助の書簡内容の大要である。

(五)、これに対する忠順の返書もある。その内

容は次の通り。(文献写真其の十二)

「閏月廿八日御認之柔雲十一月二日到來

辱拜誦至此節候而も寒風甚候へ共倍御多

祥可相成御勉学奉慶賀候著書上木願ニ付

彼是御高配相成候事千謝不尽之至候高底ニ而早

速相清恭悅仕候上木次第願納可仕候

十一月三日返事也

忠順のこの返事の字体も甚だしく読みにく

いが、大体以上の翻字になろう。

伊藤律之助に對する感謝の意を表明した御

礼状である。

以上資料を中心に「散木集標注」の上梓に
 ついて述べてきたが、この上板に当たつては
 まずその伺書を提出したのが文久二年四月廿
 六日でそれ以降思わざる原稿の滞つていた空
 白状態が続き、上板の仕事にとりかゝつたが
 今十一月三日以後であつたろう。かりに出版
 に要した期間を短かくみても一^ヶ年はかゝつた
 であらうし、するとその完成は文久三年[。] 題
 くみれば「元治に入つてからかも知れぬ。
 「標注」の自序には嘉永三年(1850)とあるが勿論

これは刊行の年ではなく忠順の散木集研究は
すでに天保十二年(1841)に始まり、かりに刊本完
成を文久三年(1863)とすればこの間はずせ三年間であ
る。この間忠順は散木集研究に精進し、その
果てに於てようやく刊本⁷散木弁致集標注し
は陽の目を見るに至つたのである。自序にあ
る嘉永三年は忠順の初稿の頃をそのまま記念
として残したのであつた。

帥
大納言
経信男

従四位下
左京大夫
行李頭
源朝臣
従四位

(A) 一 右散木奇歌集以織部正乘尹本校合了(茶書)

なものがある。

本書の奥書には写本の段階を示す次のよう

(1) 内閣文庫所蔵本「散木奇歌集」(十卷三冊本)

(二) 写本

(A) 類従本を参考してこれを茶色にし、(B) すで

に書寫したものである。書寫に当たっては、

これによると大野広城が、天保二年十一月

畢 忍屋大野広城

天保二卯年十一月令書寫追々校合書入

人書入 元本寛永之古寫本

(C) 朱書入契沖茶色類従本墨書換臣其外後

校了 密乗沙門契沖

元禄六年八月下旬得古寫本於円珠庵対

(B) 右散木奇歌集

に契沖は古写本を得て対校しており、この契
 沖の頭注などを朱で書き入れ、さらに(C) 浜臣
 其他後人の書き入れを墨で校合書入を終った
 という段階を示すものである。いわゆる大野
 本と称せらるゝ写本である。

大野広城は「元本寛永之古写本」と言つて
 いるがこれこそ契沖本のことである。大野本
 は契沖本を底本として校合を試みて本文研究
 に当たつた。それには葦・朱・墨など色分け
 を施しそれぞれ本文の識別方法をとつたの

である。

次に大野本の本文上の特色をあげると左の

如きものである。

(1) 春駒をよめる

春駒はあさかの沼にあさりしてかつみのう

らはふみしだく也(三月)(題と歌を欠く)

(注・大野本と同系統の寫本も参考として

あげておく。(1)は上賀茂神社三手文

庫本も全じく欠く。以下例示の通り)

(三手本同じ)

の
あ
る
か
と
思
へ
ば
(四
月)
(題
と
歌
を
欠
く)

卯
花
の
こ
ろ
ほ
ひ
な
れ
や
磯
の
浦
に
立
つ
し
き
波

(4) 浦 卯 花

(神
宮
文
庫
墨
本
・
小
沢
蘆
庵
本
・
三
手
本
・
昌
平
坂
本
も
同
じ)

あ
ま
の
を
ぶ
ね
も
と
か
け
り
を
欠
く。

全
「
暮
て
ゆ
く
春
を
思
ふ
も
……」
の
左
注
「
お
く
に

(3)

く。
(昌
平
坂
学
問
所
旧
蔵
本
・
三
手
文
庫
本
全
じ)

は
し
が
き
に
さ
と
を
ば
か
れ
ず
と
か
け
り
を
欠

三
月
の
歌
「
立
か
へ
り
春
思
ふ
だ
に
……」
の
左
注
「

(2)

卯花のさくらほひのしるしをさかす川を渡る浪のそとにまをく

九玉をえつれりぬ云まの家みくをえん

ゆ

卯花のさくらほひにけし白きやの峰ほしをえりて

卯花をえりて

千雜下 訛語

卯花のさくらほひにけし白きやの峰ほしをえりて

遠見卯花

卯花のさくらほひにけし白きやの峰ほしをえりて

卯花を客

卯花のさくらほひにけし白きやの峰ほしをえりて

卯花のさくらほひにけし白きやの峰ほしをえりて

大野本「散木奇歌集」(内閣文庫所蔵)
(4)の歌を書入れてある。(卯花のこほひなれや)

(5) 数ならぬ我とはなしにほととぎすよを卯の

花の垣根にぞ鳴く (四月) (この歌を欠く)

(三手本も同じ)

(6) かぎりなく思ふ心をしらするは花橘のほ

ひなりけり (四月) (この歌を欠く)

(7) 郭公をよめる

ときつ鳥をかぬ雲井にといろきて星の林は

うづもれぬらん (五月) (題と歌を欠く) (三手本も全じ)

(8) 泉をよめる

いしみつゝ隙もる水にたはぶれてつてにも

夏を聞わたる哉(六月)(題と歌を欠く)(三手本同じ)

(9) しほみてばのじまが崎のさゆり葉に波こす

風の吹ぬ日ぞなき(六月)(この歌重出)(三手本
同じ)

(10) ひまもなきあみにも鳥の驚かであそぶ羽風

に花やちるらん(萩教部)(欠く)(三手本同じ)

(11) 恋部上の歌「かき絶えてみつきに成ぬ」の左

注「みつきといふはつくしのふのかどでなり」

を欠く。(三手本・神宮文庫甲乙二本・小沢本・岸本本・冒平坂本・

尚舎源忠房本等諸本同じ)

(12)

經年恋

君こふとなるみの浦のはまひさぎしほれて

のみも年をふるかな(恋部上)(題と歌を欠く)

(13)

思へたゞ袂は露にそぼぬれてとすぐ次の

「はるかなる雲井をわたる雁がねも」の詞書

がそれぐ入れ替つてゐる。(恋部上)(三手本目じ)

(14)

「浮身なら人もつらしと」(恋部上)の作者「

四條宮甲斐」の名を欠く。

(15)

恋部上の歌「たまくしげふたみの浦に」の

題「寄鳥恋」を欠く。

(16) あさましやこは何事のさまぞとよ恋せよと

てもむまれがりけり(恋部下)(欠く)

(神宮文庫本ニ本・小沢・岸本・三手・昌平・尚舎各

本同じ)

(17) 恋草をさしにくつめる舟なれば(恋部

下)の題「海路恋」を欠く。(神宮文庫兩本

小沢・岸本・三手・昌平・尚舎各本同じ)

以上の十七個所の持つ欠陥のうち(6)、(12)、(14)、(15)、

等の脱落は本書のみの特色であるが他は三手

本・神宮文庫甲本乙本の両書(甲本・乙本は

園根慶子博士の呼称に従った小沢本・岸本本
 ・昌平坂本・尚舎本等と共存する諸例である。
 特に大野本は三手本と近い関係にあることか
 以上の例示から知られる。
 次には以上の大きな欠陥とは別に大野本
 自体に存している詞書、歌などにみられる語
 句の相違がかなり多い。これらについて例示
 し、大野本の全貌を通観したのであるが、
 その前にまた問題が残っている。それは本
 書に於ける歌の配列上の問題である。大野本

系統の諸本凡てこの配列上の問題を有して
いるのではないが、これは諸本の系統を考
える上に重要な手がかりの基底となるものである。
まず、(9)の歌の重出にかゝる「六月」の歌の
配列に他本と異なる個所がある。これは類
徒本系統と大野本系統の二種に分かたれる
大きな境界線となるものである。尤も「
六月」の歌の配列上の順序に異状の認め
られるのは、大野本・三手本及び神
寛文庫本の甲本（村井古巖の奉納本の
八巻二冊本をいう。）の三本である。

の 詞 書 か ら 一 款 は (330) ひ さ き お ふ る 片 山 蔭 の 一 款	の 二 首 の 間 に 『 泉 辺 納 涼 と い へ る 事 を よ め る 』	を ね が は ま し か ば	(323) な で し こ の 花 み る 程 の 心 に て 弥 陀 の み く に	歌 集 の 研 究 と 校 本 』 に よ る 。以下 同 じ	な で し こ の 花 一 (322) の 番 号 は 南 根 氏 の 『 散 木 奇	(322) 古 は 塵 を だ に こ そ い と ひ つ れ 雨 に し ほ れ し	位 の 他 本 と 異 な る の は 次 の 、 け (類 徒 考) る る (イ)	大 野 本 ・ 三 手 本 に お け る 六 月 』 の 款 の 配 列 順	る 。一 但 し 、 神 宮 甲 本 に は 重 出 は な い
---	---	--------------------------------------	--	---	--	--	--	--	---

配	の	の	清	は	と	稿	い		(338)
列	で	歌	水	向	共	に	る	の	し
上	あ	を	涼	題	に	既	と	吹	ほ
の	る	再	し	は	脱	出	い	ぬ	み
異	。	出	さ	な	落	(8)	つ	日	て
状	と	せ	に	か	し	「	た	ぞ	ば
は	こ	し	に	つ	て	い	形	な	野
大	ろ	め	に	た	い	る	に	き	島
野	が	て	の	が	。	。	な	ま	が
本	が	い	次	、	三	。	つ	で	崎
、	神	る	に	(329)	手	。	て	の	の
三	宮	不	ま	「	本	。	い	さ	さ
手	本	都	た	辰	も	。	る	八	ゆ
本	一	合	し	の	る	。	水	首	り
と	甲	を	ほ	市	る	。	に	が	葉
一	本	犯	み	の	ま	。	に	挿	に
致	に	し	て	う	の	。	は	入	波
し	は	て	い	る	ま	。	本	さ	こ
て	同	い	る	ま	の	。		れ	す
い	じ	る	る	の	の	。		て	風
	く								

るが重出はない。これはどういふところから
 来ていろのか。そのことについて考えてみた
 い。これは大野本・三手本に於ては書写の際
 (338) の詞書「皇后宮権大夫師時の家にて歌合に
 野風をよめりける」と、(323) の詞書「なでしこ
 をよめりける」とすぐ続いて (338) の詞書に対し
 ての歌がないため他本によつて補入し、その
 後はまた原本のまゝ写して行つたところ原本
 ではこの詞書までを前に移して歌はその後の
 方にあつたためこの歌が重出するといふ結果

になつたものであろう。この点南根氏の推定
に筆者も賛同するものである。一方神宮本へ
甲本に重出のおこななかつたのは同本が
題詞までを挿入するといふ形をとつたため
ある。

今まで述べた事とここで南俣の分のみの文
献へ写真によりその記入方法をみると、大
野広城は「いにしへは塵をだにこそいとひつ
れ……」の歌と「ひさきおふるかた山蔭の……」の
歌との間に「下のなでしこの花の歌ここに入

あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

大野本「散木奇歌集」(内閣文庫蔵)

るしと書入れ挿入の歌は「ひさきおふる」の上
に「八」の番号を附し以下「汐みてば」の上に
は番号「十六」を記入して、類徒本の順序に従う
ため「なでしこの花みるほどの」の歌には番
号「一」を記入し、右肩に小書きで「此歌上のい
にしへは塵をの次に入、是にならべて見るべし」
と書入れており、「辰の市の」の歌の上に番号「七」
を記入、「汐みてば」の歌の上には「上已出」と
し、さらに右側には小書きで本歌の題詞「皇
后宮権大夫師時の八條の家の歌合に野風を」

と群書類従本のままの表現で書き入れてある。
 かくの如く大野広城は群書類従本と対照し
 つゝ丹念に配列異状の個所を整理しているの
 である。

最後に本書のみの持つ主要な特色を左にあ
 げておこう。

(1) あさりせし水のみさびにとぢられてはすの

浮葉にかはづ鳴也(五月)

他の諸本に
 ずれも「ひし
 とする。

(2) 君が代は千年にひとつとる石のとなをこにな

らん程をこそおもへ(祝部)

他の諸本いずれも「ま[。]で[。]」とする。

(3) むかし人いかなるかばねさらされて此島に

してなを残しけん(羈旅部)

他の諸本いずれも「し[。]も[。]」とする。

(4) むろにまかりて日のありければ「い[。]」(悲歎部)

右の詞書諸本いずれも「あ[。]れ[。]」とする。

(5) 「大方かさねて彼国たへなる事を」(釈教部)

右の詞書諸本いずれも「ふ[。]さ[。]ね[。]て[。]」とする。

(6) 「殿下にてこひの心をし (恋部下)

右の詞書の下、諸本いづれも「よめる」がある。

(7) 「又女にめして男に給はせける (恋部上)

右の詞書の下に諸本いづれも「に」がある。

(8) うかりける人を初せの山あらしよはげしか

れとは祈らぬ物を (恋部下)

他の諸本いづれも「おろし」とする。

(9) 「別当実行の六條の家にて恋の心をよめる

(恋部下)

右の詞書諸本いづれも「よめる」がない。

(10) 網引するみつの浜べにさはがれてあけをさ

りのへたつかすみなり (雑部)

他の諸本いずれも「かへる」とする。

(11) 櫻だにまことに匂ふ頃ならば道を秋とも思

はざらまし (雑部) 諸本いずれも「とは」とする。

(12) 三日月のかけにかいよふかけろふのほのほ

かにてよをすぐすかな (雑部)

他の諸本いずれも「ほのほかにても」と

ある。

以上の十二例は本書のみの特色であるが、
からみて總じて他の諸本の方が正しいように
思われる。これらはおそらく書写の際に起つ
た謬誤ではなかつたかと推測される。先に述
べた(一)大きな脱落十七例と(二)この十二例(小
異ではあるが)を総合することにより大野本
の全体的欠陥が明らかになつてくるのである。

(2) 三手文庫蔵「散木奇歌集」(十卷二冊)

この「散木奇歌集」は今井似閑(明暦三年—
享保八年没。67才。京都の商人、契沖門下)が
上賀茂神社に寄進した本である。奥書がない
ので書写過程が明らかでない。しかし、似閑
は契沖に万葉を学んだ人であり、契沖本「散木
集」(寛永本)も見ていたと思われ、その
本文も大野広城本と近いから契沖本から出て

本書の本文については(1)の大野本の本文に於て見た如く非常に近似している。こゝら大

野本と同じものについては省畧して次に本書

のみの本文上の特色をあげておく。

(1) 山里はつれづれとなく鶯の声より外友なか

りけり(正月)

他の諸本いづれも「つれづれ」に「外」とする。

(2) 梢より風にもまるゝ花なればちりても水の

浪ぞおりける(二月)

- (7) 「屏風の絵に春山里に人々ながめてみ侍け
 の詞書は諸本いざれも「教縁」とする。(二月)
- (6) 「奈良の秋合に永縁にかはりてよめりける
 は諸本いざれも「いふ」とする。(二月)
- (5) 「花下旅宿といへる事をよめる」の詞書
 他の諸本いざれも「おし」とする。
- (4) 「おしてだにいはれざりけり櫻花」(二月)
 他の諸本いざれも「ふし」を「やへ」とする。
- (3) 「身のほどを何思ふらんふし咲ける」(三月)
 他の諸本いざれも「水」を「池」とする。

るに……」(三月)の詞書、諸本いずれも「る

たるに」とする。

(8) 「郭公けふは五月といふがほに……」(五月)

諸本はいずれも「いひひ」とする。

(9) 「さらし井のこのしたかげに行きふれて……」

(六月)の歌、諸本いずれも「行きふれば」

とする。

(10) 「……夕づく夜をみてよみ侍ける」(八月)

の詞書は諸本いずれも「よめる」とする。

<p>や L の 作 者 を 「 題 隆 」 と す る。 諸 本 は い ず</p>	<p>(14) 連歌 「 ほねあがり すぢさへ たかきこ まなれ</p>	<p>(雑部) の 歌、 諸 本 「 も。と。れ。 」 と する。</p>	<p>(13) 「 こぎかへ れかじも みとろし すはえし て……」</p>	<p>の 詞書は 諸本い ずれも 「 長実」 と する。</p>	<p>(12) 「 大貳仲実 の八條家 にて……」 (悪部下)</p>	<p>(以 上 の 詞 書 と 歌 と を 欠 く)</p>	<p>の と ぢ か さ ぬ ら ん 」 (十 二 月)</p>	<p>を し 鴨 の か づ く い は ま の 薄 水 け さ や う は げ</p>	<p>(11) 「 お な い 心 を よ め る</p>
---	--	---	--	--	---	--	--	--	---

れも「敦隆」とある。

以上の諸例は三手本のみの持つ特色で、明

らかに誤謬と思われる点もある。人名など特

にそうであり、これらは誤写、思い違い等か

ら起つたものであろう。

すでに(1)大野本に於て「三手本も同じ」と

私注を加えておいたが、両本の共通点は非常

に多い。またこれまで指摘しておいた以外に

も両本共通の箇所は詞書・歌の語句の上に教

多く見出すのであり、同じ大野本系統本の中
 にあつても、大野本自体と三手本とは最も近
 似してゐる。これらの点から三手本は契沖本
 (寛永本)の系統を引くものであることが明
 らかになつてくるのである。
 なお、本書のみの持つ最大の欠陥としては
 八月の歌に詞書を含めて四首脱落してゐ
 ることである。その個所には朱筆で落丁と注
 し、その歌を行間に補入してゐる。今その個
 所を示すと次の通りである。

ㄱ

河内守経國かのくに、面白所有と申

しければ、師殿思びておはしけるに天の

河といふ所にさいて中將の七夕つめ

にとよめる所なりとて舟をといめて

河のほとりにおりみて遊ばせ給けるに

かはらけとりておのゝく、
致よませ給ひ

けるによめる

△ノ千鳥なくあまの河辺にたつ霧は雲こそみゆ

る秋の夕ぐれ

霧の朝にあさひさしてやうく

きえけるを見てよめる

△又あさひさすおがはの霧の村きえてたけから

ぬ身に世をぞ恨る

右兵衛督伊通のもとにて秋霧隔水

といへる事をよめる

△3 音羽河きりの外なるたきならばいはもる玉

の数はみてまし

田上にて霧のたぢふたがりてせがのをとばかり
しければよめる

△4 旅人はきりをあけてゆとほらまし河せの浪

の音せざりせば

以上四首である。この個所次の写真に示し

ておく。なお、本書には朱筆を以て散木集か

ら勅撰集や夫木集等への入集歌の注記を施し

、また多くの校異を書き入れ批判なども加え

ている。(写真参照のこと)

(3) 神宮文庫蔵「散木奇歌集」(八卷二冊本)

本書は村井古巖の奉納した本で、林崎文庫(内宮)の旧蔵本である。一丁九行、歌は一行書き、雑以下の二巻が欠けている。奥書はない。本書は先に述べた内閣文庫の大野本と大體同じ特長を有しているが、他にも若干の欠歌がある。諸本中でも比較的古い写本といわれていゝるものである。(南根博士のいう甲本)

次に本書の主要な欠陥をあげると次の様を

ものである。(他本と共存の場合も含む)

(1) もろともに今ぞ鳴なるほととぎす 八声の鳥

はをりがつまかは (五月)

以上示した下句の個所を欠く。(昌平坂本も同じ)

(2) ⁷ 春のちちは君がなげきにーー (二月)

右の歌の詞書 ⁷返しを欠く。(昌平本も同じ)

(3) 衣手のさえゆくまゝに神なびのみむるの山

に雪ほふりつゝ (十一月) (金葉集入集)

右の歌を欠く。

(4) 君がためかけるみのりの水莖に我身をさへ

もすゝざつるかな (秋教部)

(5) 「神力品の心をよめる」 (4)の歌につづく「大空をみのりの」
風(4)の歌につづく「大空をみのりの」の詞書

右の歌・詞書を欠く。

(6) あし⁷がまのことのゆかりは大方の耳のつて

にもきこえざりけり^L (全) の一首を欠く。

(7) 人はいさ光のすぢをしるぞともおなじ佛や

しらばしるらん (全)

右の歌を欠く。(昌平校本も同じ)

(10)

「経年恋」

（君のふとな
るみの浦の……）

の詞書を欠く。

（恋部上）

(11)

沢本・岸本本・昌平板本・尚舎本などの諸本同じ

(12)

右の詞歌と歌を欠く。（神宮文庫乙本・小

(13)

たるははちす也けり（全）

(14)

そこばくの花のひもとく庭の面にをしのけ

(15)

「諸の花くさぐさにさきみだるといへる事をよめる

(16)

をよめるしを欠く。

(17)

さとりをえてそのかみの事をしるといふ事

(18)

の詞書「その園に生ぬる人は昔の事をしる

(19)

「あさましやちよの法にも……」（歌教部）の歌

(大野本・三手本同じ)

(11) あさましやこは何事のさまぞとよ恋せよと

てもむまれざりけん (恋部下) の一首を欠く。

(神宮文庫乙本・小沢本・岸本本・大野本・三手本・

昌平坂本・尚舎本等の諸本も同じ)

(12) 「海路恋」 (「恋草をさしに」につめる無なれば!) の詞書(全)を欠く。

(神宮乙本・小沢本・岸本本・大野本・三手本・昌平坂本・尚舎本等同じ)

以上十二例の中、(3)・(4)・(5)・(6)・(8)の五例が本書

のみの持つ欠陥である。これに更に大野本系

続本としての特色たる「六月」の歌の配列上に
 異状の存してゐることは大野本の項ですでに
 述べた通りである。

以上の本書に於ける大きな欠陥の外に本書
 のみの特色とみらるべき語句の相違、或いは
 小異（助詞・助動詞などの相違箇所）を調査
 してみると凡そ九十箇所ほどある。これに「詞
 書」の異同を加えると更にその箇所は増大して
 くるのである。

今、詞書、小異の箇所は省略してその主要

な歌のみを少し例示してみると次の様なものがある。

(1) いとゞしく声なつかしき鴛はいはねもや梅

の香ににほふらん（正月）（諸本は「はね」とする）

(2) 心あらばとまゝし物を梅の花たが里よりか

にほひきつらん（全）（新古今集入集）

諸本「とほましが多い。但し書陵部本は

「とほし」とある。

(3) めぐむよりけしきことなる花なればさむく

● も枝のなつかしきかな (二月)

(諸本「かねても。但し書陵部本は「かねて」とす。)

(4) 春風にあらぬ身なれぬ桜ばなたづぬる人に

いとはれにけり (五) (諸本「なれど」とす。)

(5) 君がためやよひになれば夜毒さへあべの重

ちにはろこつむ也 (三月) (諸本「いちぢ」とす。)

(6) をとせぬは待人からかほとゝぎす誰おしへ

けんゆへなうぬ身を (五月) (諸本「敷」とす。)

(7) 流しつるけこのみおもり□そひてさやたの

早苗とりもやられず(全)

諸本□の個所に「教」あり。

(8) 蘆のやの垣ほのぐとしらむまでもえあかし

てもゆく屋かな(全)(諸本の中、大野本・三手

本は「軒」とする。他は「ひま」とする。

(9) 沢□なる堂も風にはかられて今日を秋とや

鴈につぐらん(六月)(諸本□に「べ」あり。

(10) 玉かしばすゑこす風にはかられてまだきに

きみや声たてつらん(全)

この訓が多いが向宮本では「すこか」岸本本で	この致も異訓多く、類従本は「すとか」とあり	こきませでけり（八月）	(12) 山里はすかこたけかきさきはやす萩女郎花	た下句諸本いずれも「涙」に _L とある。	るがその他「たまゆか」た「まゆる」等とあり、ま	(11) この致異訓多し。類従本は「たまゆり」とあ	んあかぬ涙を（七月）	(11) 七夕の天の川ゆかこよひさへながれやすら	諸本はいずれも「鹿」 _L とする。
-----------------------	-----------------------	-------------	--------------------------	---------------------------------	-------------------------	---------------------------	------------	--------------------------	------------------------------

は^レか^ハこ^ハか^ハと^レあ^ル。

(13) 花薄まるをれいとをくりかけて絶ずも人を

まねきつるかな (全)

これも異訓多く類従本^レま^ハそ^ハほ^ハの^レ書^レ陵^レ部

岸本兩本は^レま^ハそ^ハを^レの^レ神^レ寛^レ乙^レ本^レでは^レま^ハあ^ハ

を^レの^レと^レあ^ル。

(14) はやく出てかど田にやどれ秋の月はのぼる

つきの数や見ゆると (全) (諸本は^レ露^ハと^レする)

(15) 紅葉ちる清滝川にふねを^レお^レして^レ名^レに^レな^レが^レれ

たる月をこそみれ (全) (諸本^レふ^ハな^ハで^レして^レと^レする)

(16) すみのぼる心や空をはらふらん雲のちりみ

の秋のよの月(全)(金葉集入集)

(諸本多くは「ぬぬ」但し岸本本は「ぬる」とする)

(17) こがらしの雲うちはらふたかねよりさえて

も月のすみのぼるらん(全)(千載集入集)

(諸本は「吹」結句は「かな」が多い。但し「ら

ん」は他に大野本・三手本がある)

(18) むら雲や月のむらむらむらむらむらむらむらむらむら

たびにてり増るかな(全)(金葉集入集)

(諸本いざれも「くま」とする)

(19) けさよりはみはらの池につらゝぬてあせの

むら鳥隙もとむらし(十二月)

（類徒本系は「けふらん」とする。）

(20) 君が代は松のうは葉にをく露のつもりてよ

ものくになるまで（祝部）（金葉集入集）

諸本はすべて「海」とする。

(21) 夜をこめて朝まつをのゝ草しげりしほるゝ

袖は露の玉水（別離）（諸本は「立つしげみ」とする。）

(22) 住吉のちぎのかたそぎゆきもあはで霜をき

まよふゆきはきにけり（神祇）（新後拾遺集入）

本、三手本は本書と同じく「めやしとする。」

(諸本「ながれつゝく、結句は「ばやし、但し、大野

くらん水にぬれめやし(全)

(24) あが袖のしほるとなればながめつゝ法をと

諸本の結句「いずれも「けすがに」とある。」

但し神宮乙本・大野本は本書と同じ。また

(諸本は「させし、けられは諸本「けらし多し。」

る光やみもせする。(釈教部)

(23) ならくかの底までませやしれなくほにて

(23) (諸本「いずれも「冬」とする。)

(25) 春雨のあしとは人のふりくれどまがなくも

みえず程のひろきに(全)

(諸本「まなく」^レ「ひろさ」^レとする。但し類従

本系は「まなく」^レ「ひろさ」^レとする。)

(26) これをみよむつ田の淀にさでさしてしほれ

ししづのあかの衣とは(恵部下)(千載集入集)

類従本「あさ衣かは」とする。

(27) 露を みたはりに白ふ萩のえのえもいひし

らぬ恋もするかな(全)

諸本 の個所に「重」あり。

(28) 霜がれの野べともなしに春たてばもえずも

物を思ふ頃かな (全) (諸本は「もえて」とする)

(29) なこそてふ言葉も君がことぐさを閑の名ぞ

とも思ひよるかな (全) (金葉集入集)

(類従本系は「言葉は」「ける」とする)

(30) 口おしき雲井かくれにすむたつも思ふ人に

は見ゆなる物を (全)

(諸本いずれも「口おしや、類従本系では「見

えける」とする)

以上の外にまだその例は多く見出だすので
あるが、勅撰入集及び主だった歌の異同につ
き見てきた。その總合した結果から本書のみ
の持つ明らかかな誤謬、脱落と思われれるものも
多く中には(28)の如く全く反対の意味になる歌
もある。勅撰集入集歌、或いは歌合に於ける
作品(30)の如き)をそれぞれでみても本書の
如き訓みにはなつていない。こゝうした例から
他の語句の相違も凡そ本書の誤写と推定され
るものが多く以上の不備をもつのが「神宮文庫」

甲本の本文上の欠陥というこゝが出来るのである。

一丁十二行。歌は一行書きである。本文の内容からみれば「六月」の歌の配列には大野本、三手本と同じ形をとつてゐるが、以上見てきた歌の本文の点、又詞書の表記など寛永本とは異なつてゐる所から契沖本から出てゐるとは言えない。そういう意味から本書は大野本三手本とは孤立した位相にあると判断される。写本といふべきである。

(4) 神宮文庫蔵「散木奇歌集」(八卷八冊本)

この写本も同じく村井古巖の献納本。表紙

には「散木抄畧本」とある。但し中は各巻と

も「散木奇歌集」となっている。一丁十行、

歌は二行書きという特色を有し(3)の神宮文庫

甲本とは形式の上からも全く異なっている。

神宮文庫乙本と呼ばれるのもここにその理由

がある。

季四卷までには甚だしい錯簡を生じている。
また「俊成卿女集」^L「堀川院御百首抄」^Lなど
が混入して同冊になつてゐる。かかる乱丁は
他本には勿論見出せなく本書のみの特色であ
る。第五祝部以下四卷四冊（雑部の巻は欠）
には錯簡はない。ただ以上の錯簡を有し他本
の混入などのあるところからして先にあげた
奥書が散木集そのものの写本の日であるか否
かは岡根博士の指摘の通り決定しかねるので
ある。文亀二年（一五〇二）は中世であり、

その書写年代はかなり古いことは言える。か
 つて神宮文庫を訪い本書の錯簡個所を整理する
 のにかなりの時間を要した筆者の体験を今思
 い出すのであるが、不要な混入個所を除去し
 他本を参照して順序を正すと多少の欠点は
 残るが尋常普通の散木集が再生される。
 本書の題には「散木奇歌集卷第一」と巻
 を入れており他と異なる。(第一以下も同じ)
 さて錯簡乱丁の全部とこで示す紙幅はな
 いか、その特色を一部見てみよう。

この乱丁は春部（正月）の二丁表からすでに
生じている。（歎の番号は岡根慶子氏著「散本奇
歌集の研究と校本」による。）
巻頭一丁表は普通であるが一丁裏（5）「
しかと末の松山かすめるは」は二行書きのた
めこの上句で終り、二丁表には「堀川院御百
首抄・以法橋玄仲本写之」とあり他の歌集が
混入してきているのである。そればかりでは
なく、つづいて「俊成卿女集」も混入し、こ
の他本二書の間にも乱丁あり、四丁表は「俊

ま	日	裏	た	も	程	の	み	庫	
で	山	に	る	そ	し	詞	つ	乙	か
が	ふ	逆	を	の	ま	書	し	本	く
綴	も	も	み	詞	で	前	ほ	では	し
じ	と	ど	て	書	が	半	に	冬	て
こ	の	り	よ	の	配	「	一	部	正
ま	を	し	め	後	列	伊	一	六	月
れ	の	て	る	半	さ	勢	の	丁	の
て	に	以	る	「	れ	に	歌	に	歌
い	子	下	は	よ	て	侍	か	(11)	の
る	日	(18)	そ	も	い	け	ら	「	大
。	し	の	の	の	る	る	(18)	春	き
	て	歌	ま	山	こ	頃	「	霞	な
	し	か	ま	辺	と	む	都	た	乱
	し	ら	ま	か	で	つ	へ	な	丁
	((21)	ま	す	あ	き	と	び	は
	上	の	つ	み	る	の	い	く	神
	句	歌	づ	わ	。	四	そ	く	寛
	の	「	か	た	し	五	ぎ	浦	文
	み	春	ず	り	か	日	て	は	
)		四				し		
			丁				。		

寛しく書たる絵をこれ致によみなしてたてま
 つれ仰ありければ屋のつまに女男にあひたる
 …に終つている。ところでこの詞書の後半「
 前に梅花風に従ひて男のなをしうへにかゝ
 りしおさなきちごのむかひぬて散かゝりたる梅
 をひろひとるかたある所をよめるしは冬部
 へ乙本の四ノ上」から再び前の方へ乙本の一
 ノ三に移動し十一丁に配置され(71)の「風を
 いたみまつらの山にちる花やふりけん袖の名
 残なるらん」(但し)下句は神宮乙本欠く)の

致を以て十三丁が終つてゐるのである。

以上は正月の、しかも錯簡の特に著しい個

所のみを一つの例として述べてきたのである

が、こゝした点はこの神宮本乙本には第一（

春部）から第四（冬部）までずっと続く。そ

の向には散本集自体のみでなく他本の混入と

いゝ複雑な要素が加わり問題は一層複雑化する

る。同じ正月の致が正月といふ月に於て乱丁

が生じていればまたしも、さうではなくて他

の月にまたたがるといふ乱丁の形をとつてゐる

のであるから、一つの月の歌は他の月の歌の
配列とも関係を相互に保ち合うということに
なるのである。しかも歌が二行書きのため、
一首の歌が上句と下句に寸断され別々な丁に
分離される。この事はまた長い詞書の場合も
全いで上半、下半と分離して配列されるとい
う結果を生じたのである。これらと調整すれ
ば正常な普通の形にはなるがともかくも是た
しい錯簡乱丁は乙本のみの持つ特色というべ
きで、こうしたまままで奉納されたものであ
る

う。
 さて、神宮乙本は大野本系統に属していて
 これら同系統の他本と歌の本文及びその詞書
 とを類従本と比較した場合かなり共通の面を
 有することは当然であるが、そのうち特に小
 沢本と岸本本に共通している点が多い。次に
 詞書まで考慮に入れて検討するのが本当であ
 るが全り煩雑になるので一応除外して歌の本
 文のみを対象としてまず本写本の脱落歌（こ
 れは本書のみの特色でない場合も含む）をあげると

左の如くである。

(1) いっしかと末の松山かすめるはなみと共に

や春もこゆらん (正月)

(この歌下句を欠く。)

(2) 風をいたみまつらの山にちる花やふりけん

神の名残なるらん (三月) (この歌も下句を欠く)

(3) とりつなげたまたよこのう放れ駒つらじが

岡にあせみさくなり (三月)

(この歌も下句を欠く)

右の歌と詞書脱落（岸本本、小沢本も全じ）	「授記品の中に」を（次の歌の詞書）	みなきはわが獨かな（秋教部）	(7) うち [」] はへてたのむみやまのあをつから苦し	に雪はふりつゝ（十二月）（下句欠く）（金葉集入）	(6) 衣手のさえゆくまゝに神なびのみむろの山	教をしらまし（八月）（結句欠く。小沢本同じ）	(5) 秋はぎの下葉に月の宿らばあけてや露の	友となりける（六月）（岸本本も欠く）	(4) くる人もなき山里はかやり火のくゆる烟ぞ
----------------------	-------------------	----------------	---------------------------------------	--------------------------	-------------------------	------------------------	------------------------	--------------------	-------------------------

(8) 「難思光仏」

「人はいさ光のすぢを知るぞとも同じ仏や知

らば知るらん」(全)(以上の詞書と歌を欠く。小沢本、岸本本同じ)

以上八首(詞書も含めて)の中本写本のみの

脱落歌は(1)(2)(3)(6)の四首である。これは神寛

乙事の書写の場合の書き落としてあるう。

次に諸本の中に於て本書のみの語句の相違

がある。それは次の通り。

(1) おいらくの腰ふたへなる身なれども卯杖を

つきて若れをぞつむ(正月)(諸本は「若菜」)

以下校異の記載様式は群書類従本を底本と

のこさましやは(全)(諸本「人のレ但し昌平坂本は人レにレ

(6) 櫻花たをれど散らぬものならばこぎずゑに人

りみるべかりけれ(全)(諸本は「こ、そ、レ)

(5) はく人もなき古里の庭のおもは花ちりてよ

(4) 梅の花ちる本のもとに風吹ばレ!! (二月)(諸本はレ櫻ばな)

しるし成けり(全)(諸本はける。)

(3) 山里はつもれる雪のいつしかと消るぞ春の

杖をつくにや有らん(全)(諸本は「こえくるレ。)

(2) いまぞ知るこえつる山のはけしさに年レもレう

	(11)		(10)		(9)	(8)		(7)	
る	を	も	み	さ	桜	花	人	わ	し
ふ	る	お	な	か	に	の	し	れ	て
し	な	ら	そ	や	も	ち	な	よ	そ
み	み	む	こ	ま	枝	る	け	り	の
る	の	山	に	ま	さ	下	れ	も	右
山	う	吹	し	ひ	し	行	ば	櫻	傍
吹	し	の	し	せ	か	水	(ぞ	に
の	ろ	花	づ	り	は	の	全	花	乙
花	め	(め	(す	そ)	を	本
(め	全	る	三	も	こ		お	の
全	た)	枝	月	も	み		し	校
)	さ		の)	な	れ		む	異
	に		し		れ	ば		べ	を
	め		づ		ば	空		き	平
	も		く		空	さ		枝	す
	か		に		さ	へ		を	こ
	れ		は		け	さ		し	と
	ず		ぬ		さ	は		忍	に
	た		る		は			ぶ	す
	ち		と						る
									。

	(16)		(15)		(14)		(13)		(12)
を	秋	れ	秋	ぞ	ほ	に	雪	ふ	立
な	萩	て	来	お	と	疑	の	待	か
つ	を	暮	て	ど	と	が	色	く	へ
み	を	か	は	ろ	ぎ	は	を	ら	り
て	心	ゝ	は	か	す	る	を	し	春
ぞ	に	る	忍	れ	を	ら	ぬ	つ	思
ゆ	か	ら	び	ぬ	の	ん	す	る	ふ
く	け	ん	な	る	が	(四	み	(今	だ
(八	て	(七	あ	(全	ね	月)	て)	に
月)	を	月)	へ)	覚	(詞	さ		あ
	か		そ		の	花	け		る
	ぎ		と		初	集	る		も
	きの		思		声	入)	卵		の
	の		へ		に		花		を
	お		は		ま		は		を
	ほ		や		つ		は		君
	み		風		人		さ		を
	あ		を		さ		し		さ
	し		と		さ		て		へ
	ち		づ		へ		や		け
							人		

	(21)		(20)		(19)		(18)		(17)
し	し	月の	は	り	く	し	か	ま	花
を	ぐ	の	れ	も	ま	て	ず	ね	薄
ち	る	光	ぬ	ひ	も	も	な	き	ま
の	れ	な	れ	る	な	あ	ら	つ	そ
た	ば	り	ば	と	き	か	う	る	ほ
か	夕	け	残	な	月	し	で	か	の
ね	く	れ	れ	く	の	つ	ふ	な	い
ぞ	れ		る	也	老	る	り		と
(な	(く	(に	る	ぬ	(を
十	る	全	ま	九	は	か	る	全	く
月	の)	も	月	か	ら	こ)	り
)	花		な)	れ	れ	と		か
	衣		かり		て	て	を		り
	た		け		お	お	鈴		か
	が		り		ほ	ほ	虫		け
	そ		り		を	を	と		て
	め		空		そ	そ	な		絶
	かけ		こ		ど	ど	き		ず
			そ				かは		も
									人
									を

	(26)		(25)		(24)		(23)		(22)
老	い	が	く	し	名	み	君	し	い
ぞ	り	れ	る	と	残	え	が	の	か
さ	が	に	し	教	な	ぬ	代	山	ば
は	た	し	み	へ	き	は	を	を	か
ら	き	に	を	が	物	は	い	そ	り
ざ	人	弥	な	り	と	る	は	む	涙
り	も	陀	し	せ	や	か	は	ら	の
け	さ	の	と	ば	花	な	ぬ	む	し
る	と	御	も	(を	り	に	(ぐ
(り	園	更	秋	お	と	ひ	十	れ
全	の	は	に	教	も	(ける	月	色
)	ひ	(い	部	は	祝	あ)	な
	ら	全	は)	ま	部	や		れ
	ら)	し		し	(め		ば
	く		み		身		草		な
	に		づ		に		ね		げ
	は		名		な		ね		き
	の		に		る		ご		お
	ぞ		な		べ		と		ほ
	む						に		

この外詞書を はじめ本写本と 共通な語句をも	以上歌のみに ついてきたので あるが、	ひにたち休ら ふと（恋部下）	(30) 心あひの風ほ のめかせやへ すかき隙なき思	よりおふる也 けり（全）	(29) あすれ草し げれる宿をきて みれば思ひのき	すくも打とく るかな（恋部上） （新古今入）	(28) あしのやの しづはたおび のかたむすび心や	はあしみだに なし（全）	(27) 流れくる御 法の水にあら はれてみつの 道に
------------------------------	---------------------------	-------------------	----------------------------------	-----------------	----------------------------------	------------------------------	----------------------------------	-----------------	--------------------------------------

			出	の		写	(1)	多	つ
			来	具		本	(4)	く	例
			る	体		の	(6)	の	へ
			の	的		誤	(7)	致	僅
			で	本		写	(8)	と	か
			あ	文		或	(10)	を	ニ
			る	上		い	(11)	あ	本
			。	の		は	(17)	げ	に
				内		脱	(19)	得	限
				容		落	(21)	る	定
				を		と	(26)	。	し
				う		思	(29)	以	て
				か		わ		上	も
				が		れ		の	を
				い		る		三	あ
				知		も		十	げ
				る		の		首	る
				こ		で		の	と
				と		あ		例	ま
				が		る		の中	だ

(5) 回学院 大学蔵「散木寄歌集」(十卷三冊本)

本写本は水野忠欵氏旧蔵本である。一面十

行で欵は一行書き。詞書は五字下げという形

をとる。小沢蘆庵の書写本。本書の題には、

「散木寄歌集巻第一」とあり、「寄」の字を

用いた稀な本で、「巻」の字をに入れているのは

神宮文庫乙本と同じ。本文校訂上注意すべき

は、先の巻第一といふ題の下に(一)、「朱校契沖手

寫本也。分為三本。此本下卷私補入顯昭注九十

七首廿四張契沖本哥一首一行書しと書き入れ

てある。(寫真其の一) (これは朱書) さらに卷第九の下には

(二) 自是以下依無他本所書寫以元本校合更得

異本可再校也しと書き入れ(これは青書)

てある。(寫真其の二) またその奥書には蘆庵自署になる、

(三) 右散木彙歌集三卷詠讚岐守美令新寫校合

畢朱如元本青私所書加也

干時安永八巳亥年正月十日 蘆庵

と、いう校合のことと年記がある。(寫真其の三)

以上の如く(一)朱書(二)青書(三)奥書と蘆庵の書
き入れは本書の複雑な書写過程を示すもので
ある。結局これと総合して考えると本文は元
本にあつた朱校(契沖本)をそのまま写し、
元本の八巻本を上中二冊にして題照注九十七
首を下巻として三冊本にし、さらに欠巻とな
つている雑部二巻を補入してここに十巻三冊
本の形が成立したものである。尚、本書には
これらと別に後人が黒色がかつた朱で類従本
の校合を施しているのが目につく。

小沢本の本文上の特色は先にも述べた題昭
 注九十七首（実は九十八首ある）を合してい
 ることである。これについての奥書は次の如
 き形で書かれていゝ。（六行書き）

本云

（次の頁の文献寫真参照）

（其の四）

壽永二年十月七日奉

梁園教命注進之

重下給差聲了

題昭

文禄三年四月廿七日寫之題昭親之本也

こゝで「本云」とあるのは群書類従本顯昭注
 (散木集注)をいう。「壽永二年……顯昭」までは
 群書類従本のまゝであるが、そのあとの年記
 「文祿三年……」とあるのは誰が寫本したのか
 不明であるが顯昭の親本たることを明記して
 いる。蘆庵はこれを参照したのである。
 次に本文上の肉題にうつるが、本書は「神
 宮乙本・岸本本等に共通した本文を有し、「散
 木奇歌集卷第□」の如く「卷」の字が三本にあ
 り、「神祇部」(他本は「部」なし)とあるのも三本の

みの特色である。詞書の中に部分的脱落を共有してゐるのもこれら三本である。

(一) 歌と左注の脱落(本書のみでなく他本も含む)

(1) 左注「おくにあまのをぶねもとかけり」(三月)

(大野本・三手本・昌平坂本・神宮乙本も同じ。以

下大野本は大、三手本は三の如く畧して用う。)

(2) 春末ては心の松にかゝりつるふぢのはつ花

咲そめにけり(三月) は脱。神乙本と二本のみ

(3) 秋はぎの下葉に月の宿らずはあけてや露の

数をしらまし(八月)(神乙と二本のみ)

(4) 「うちにはへてたのむみやまのあをついら苦

しみなきはあが獨かな (釈教部)

「授記品」の心を (次の歌の詞書)

(右の歌と詞書脱落は神乙本・岸本本も同じ)

(5) 「難思光仏」

「人はいさ光のすぢをしるぞとも同じ仏や

知らば知るらん (全) (神乙本・岸本本全)

(6) (左注) みづきといふはつくしのふのかどでなり

(糸部上) (神甲乙本・岸・大・三・昌・尚の諸本同じ)

(7)

「しもつけ」

「恨みても何にかはせん花みると今朝しもつ

けぬ心せばさは（雑部下、隠題）

以上七例のうち、本写本のみの脱落は(7)の

けで書写の際書き落したものであろう。

(二) 本書のみの歌の本文で諸本と相違するもの。

この肉題についてはその数もかなり多い。

詞書まで入れると尚相当な数にのぼるか、次

にその主要な歌のみを例示する。(本書のみの

(5)	な き つ <small>き</small> と も 誰 に か い は ん 時 鳥 …… (<small>全</small>)	か さ ね よ い く へ な り と も (<small>五月</small>)	(4)	み <small>み</small> く <small>よ</small> ま <small>し</small> の <small>の</small> 、 は ま ゆ ふ か け て ほ と 、 ぎ す 鳴 <small>と</small> 音 <small>か</small>	に う ら も な し と は <small>ぞ</small> (<small>四月</small>)	(3)	夏 衣 た ち き る け ふ の し ら か さ ね し ら じ な 人	(2)	桜 に <small>を</small> も 枝 さ し か は す も <small>花</small> な れ ば …… (<small>三月</small>)	そ <small>に</small> お <small>な</small> り <small>を</small> ぞ わ づ ら ふ (<small>二月</small>) (<small>夫木抄方代和歌集入</small>)	(1)	し ろ 妙 の 花 の 梢 に め を か け て い そ し の み ね	る 場 合 は 除 外 し た 。 (<small>底本は群書類従本</small>)	語 句 の 相 違 で あ つ て も 諸 本 に も 種 々 異 訓 の あ
-----	--	--	-----	---	--	-----	---	-----	--	--	-----	---	--	--

- (12) 秋かぜの音につけてぞうちまさる……(八月)
- (11) 河霧の煙とみえてたつなべに……(八月)
- かきみだるらん (七月)
- (10) おぎのはの軒のあまりに音づれて人の心を
- 雲かくれゆく (今) (新古今入集)
- (9) とをちには夕立ちし久かたの天のかぐ山
- (8) 山里のこやのえびらにもる月の……(六月)
- (7) 嬉しさのねをさへけさばかりる哉……(今)
- ば過にける哉 (今)
- (6) 時鳥なげきのもりにあかずして君がまつを

	(24)	(23)		(22)	(21)		(20)		(19)
と	藤	君	こ	君	は	な	あ	枯	ひ
も	衣	が	ぶ	こ	は	ら	れ	葉	と
な	袖	住	す	は	ら	で	は	に	り
き	は	く	ま	と	の	は	て	本	ぬ
(あ	し	引	は	池	も	ゝ	葉	る
悲	か	た	き	は	の	も	む	散	ふ
歎	し	河	て	に	の	る	ね	也	せ
部	の	に	こ	ふ	あ	人	も	(や
)	浦	や	そ	の	しま	も	く	十	の
	な	み	を	こ	に	も	も	月	ひ
	れ	だ	れ	や	宿	ら	ら)	ま
	や	れ	(の	る	ぬ	宿		の
	か	た	全	ゆ	月	宿	な		し
	か	る)	か	影	れ	れ		ら
	へ	神	(の	は	は	あ		む
	る	の	次	上	い	ま	う		ま
	涙	心	郎	に	い	で	れ		で
	ぞ	も	百	あ	い				サ
	時	い	首	さ	い				秋
	ぞ	に)	さ	い				の
	に	祝		で)				
		部							

以下、紙幅の關係で一首の中に枝異二個^{以上}ある

るもの、及び一個所でもそれにより意味の異

なるものののみをあげ他は畧す。

(31) いりがたき人も^をさとりのひら^みらく^くにはのぞむ

光ぞさはらざりける (釈教部)

(32) 誰しか^ともあはれとみえんけぬも^ぬせで^ぬやまか

た^はつける春のけ^はたれを (全)

(33) よもの^{世に}くに^に法とく^と庭のしげ^こきか^とと思へば^とみ

だの光成けり (全)

	(38)		(37)		(36)		(35)		(34)
の	住	ぞ	せ	み	ひ	あ	ま	な	文
い	吉	お	た	は	え	し	ま	き	み
つ	と	も	の	な	ら	と	づ	ま	す
と	き	か	は	が	の	と	き	で	と
な	く	け	し	れ	山	は	て	ぬ	き
け	し	に	村	て	そ	し	は	る	く
れ	に	た	の	ぞ	の	た	人	ゝ	に
ば	も	つ	馬	ふ	大	な	め	袖	つ
(全)	か	(全)	ふ	る	た	め	もし	かな	け
	ゝ		み	(全)	け	けん	ら	(悪	て
	る		く	(次	は	(全)	ず	部	も
	涙		ち	郎	か		あ	上	う
	かな		め	百	く		た)	た
	あ		お	首	れ		た		し
	ふ		ほ		ね		ら		め
	せ		み		ど		し		め
	まつ		そ		な		を		の
	ま		こ		を		何		は
			の		水		さ		し
			涙		の		ま		た
							あ		
							さ		

	(43)		(42)		(41)		(40)		(39)
ば	を	ら	こ	ど	石	く	年	に	ち
し	ち	で	り	む	石	な	ふ	お	つ
る	こ	人	は	物	ば	み	れ	も	の
人	ち	か	て	と	し	は	と	ね	ほ
も	の	へ	ぬ	こ	し	は	こ	る	き
あ	と	し	に	そ	な	面	す	心	と
ら	山	つ	ゑ	き	み	影	の	な	ち
じ	の	る	の	け	は	に	き	り	の
	裾		初		た	た	け	せ	わ
(雑部)	を	(全)	雁	(全)	つ	つ	き	ば	た
	恋		あ		(全)		の	(恋部下)	を
	し		さ				の		も
	と		に				絶		こ
	も		す				え		え
	い		る				ま		ぬ
	は		宿				よ		べ
	で		に				り		し
	思		も				み		そ
	へ		あ				え		れ
							つ		

首の	集入集の	さて、	した歌まで	少なくない	みの校異を調査して	似した本文を有して	すでに述べた如く	にしほつたが	以上、
(22)	(9)	こ	例示する	い	調査して	有して	た	四	煩雑さを
(36)	(15)	こ	と	の	して	いて	が	十	を
の歌を	(27)	で	その	で	みる	いる	四	八	避け
をそれ	(30)	一	の	ある	と	が	十	例	ける
ぐ	(=)	つ	その	。詞書	必ず	以上	八	にも	る
の肉係	夫木抄	の	数は	や他の	し	の	違	違	意味
歌書で	(1)	か	倍加	の諸本	も	様	した	した	から
みると	(三)	り	する	と共通	その	に	。本	本	(31)
	次郎百	と			数は	本	写	本	以降
		し				本	本	は	さら
		て				は			
		、							
		こ							
		こ							
		で							
		一							
		つ							
		の							
		手							
		が							
		か							
		り							
		と							
		し							
		て							
		(一)							
		勅撰							

落
 な
 び
 の
 異
 変
 が
 あ
 り
 甚
 本
 と
 は
 い
 わ
 れ
 な
 い
 。
 以

文
 は
 も
 と
 よ
 り
 詞
 書
 の
 本
 文
 に
 も
 か
 な
 り
 誤
 写
 、
 脱

き
 し
 か
 し
 、
 全
 般
 的
 に
 み
 て
 本
 寫
 本
 に
 は
 歎
 の
 本

正
 し
 い
 と
 思
 わ
 れ
 る
 の
 も
 あ
 る
 。
 (25)
 (32)
 (34)
 の
 歎
 の
 如

る
 。
 ま
 た
 一
 方
 歎
 の
 意
 味
 か
 ら
 み
 て
 本
 寫
 本
 の
 方
 が

ら
 か
 に
 脱
 落
 と
 思
 わ
 れ
 る
 歎
 に
 (15)
 (16)
 (26)
 (39)
 (42)
 等
 が
 あ

て
 誤
 寫
 と
 思
 わ
 れ
 る
 歎
 に
 (4)
 (5)
 (6)
 (29)
 (31)
 が
 あ
 り
 、
 明

の
 こ
 と
 に
 よ
 つ
 て
 知
 ら
 れ
 る
 。
 こ
 れ
 ら
 か
 ら
 類
 推
 し

示
 し
 た
 小
 沢
 本
 校
 異
 は
 誤
 寫
 で
 あ
 る
 こ
 と
 が
 こ
 れ
 ら

小
 沢
 本
 の
 よ
 う
 な
 訓
 み
 に
 は
 な
 つ
 て
 い
 な
 い
 。
 先
 に

ある。

上のことが小沢本の内容としての本文久陥で

(6) 国会図書館上野分館蔵

「散木弁歌集」(十卷五冊)

本写本は岸本由豆流(寛政元—弘化三・58_才没)

の旧蔵本である。合綴改装の表紙には「散木

弁歌集^〇とあるが、旧装の表紙は「散木奇歌^〇

集^〇とあり各巻とも「奇^〇と用いている。奥

書がないのでその書写過程は明らかでないが

江戸末期のものでありろう。(南根慶子氏説に従

う。) 本文として
校合もなされ
「イ本」の書
入もみえるが
諸本の中にあ
つては最も粗
悪本である。

本文上 岸本本の
大きな欠陥は
部分的脱落も
多いが、まず
詞書、歌などの
欠けているのが
目につく。それ
らとあげると次
の通り。

(1) 毎夜待郭公

時鳥よごろ心をつく
させて今日どかすか
に
ほのめかしつる
(五月)

(2) いしみつゝ、障もる水にたはぶれてつてにも

夏を聞わたる哉（六月）

百首歌中に泉をよめる（次の歌の詞書）

(3) くる人もなき山里はかやり火のくゆる烟ぞ

友となりける（今）（神乙本も同じく欠く）

(4) あひ見てはたちもはなれぬ心をぞ（七夕）

にかすべかりける（七月）（詞書と歌）

(5) 思ひがたき光といへる事をよめる

そのほどゝ思ひ難きはよもの海にそこひも

しらぬ心成けり（秋歌部）（詞書と歌）

但し歌は神甲之
小沢・昌・尚各本
も欠く

(6) 「諸の花くさぐさにさきみだるといへる事をよめる」

「そこはくの花のひもとく庭の面にをしのけ

たるははちす也けり」(左)

(神宮甲乙本・小・昌・高も同じく欠く)
の諸本

(7) 左注「みづきといふはつくしのふのかどでなり」(恋部上)

(神甲乙・小・大・三・昌・高の諸本同じく欠く)

「懐旧」

(8) 「恋しともいはでぞ思ふたまきはる立かへ

るべき昔ならねば」(雑部)(詞書と歌)

(9) 「家道朝臣」(かへしの作者名)(全)

ろ う。 以上が 本写本 の根本 的欠陥 である が、	例が ない。 これは 書写の 際の書 き落と しであ る。	かも (9)・ (12)が 作者名 の脱著 である ことは 他本に	他の十 例が本 写本の みのも つ脱著 である 。	以上 のうち (6)・ (7)は 他本に も共有 する欠 歎で	(12)「 作者「安 芸守重 基」の名 (連歎)	さつを のたゆ みなの よや(全)	(11)し みづ山 ならの ましば にかざ られて ねらふ	なき身 をいか にせん (雑部・ 恨躬耻 運雜歎 百首)	(10)ふ しつけ しをど ろの下 にすむ はえの 心おさ
--	--	--	---	--	--------------------------------------	----------------------------	---	--	---

次に本書のみのもつ部分的相違もかなり多

いのでその校異を示す。(但し、詞書は省略。

歌の本文も他本との共存の場合はこれを除外

した。

(1) たぐひなき心ひろさをかたみにて……(正月)

(2) おいらくの腰ふたへなる身なれども……(令)

(3) 妹背山谷ふところにおひたちて……(二月)

(4) 桜花をのがもろさのゆふばへに心をさへも

ちらしつるかな(令)

(5) 花のちる下行水のそこみれば……(令)

	(10)		(9)		(8)		(7)		(6)
の	い	ぞ	桜	れ	春	お	を	さ	あ
か	と	春	だ	か	こ	ふ	る	へ	ぢ
た	ぐ	は	に	か	そ	し	な	も	き
み	し	悪	散	た	は	み	み	思	な
と	く	し	の	み	か	る	の	ひ	や
思	み	き	こ	と	ぎ	山	う	た	小
へ	る		ら	も	り	吹	し	っ	山
ば	空		ば	み	も	の	ろ	哉	田
	ぞ		と	ん	あ	花	め	(全)	を
(全)	な	(三月)	い	(全)	ら	(全)	た		こ
	き	(続古今入集)	ひ		め		さ		そ
	梅		し		み		に		か
	ば		か		よ		め		へ
	な		ど		し		も		し
	わか		花		の		か		つ
	かれ		見		に		れ		れ
	し		て		霞		ず		雁
	春		し		は		た		が
			も		残		ち		ね
					残				

(16) さみだれはもりにし水も岩こえて庭もぬま

のぬまえとぞみる (全) (金葉集初度本入集)

(15) 五月雨はふるからをのゝ志水をしひたすら

やめのねもはるかなり (全)

(14) み垣も衛士の玉えにおりたちてひけばあ

のねをのみぞなく (全)

(13) 人はいさわれはよひよりあふ岐の夕つけ鳥

のゝにくきら鳴也 (全) (夫木抄入)

(12) これきかむこせのさやまの杉が上に雨もし

(11) 時雨をのね山のしるしばに (五月) (夫木抄入)

待をのね山

(22)	(21)	(20)		(19)		(18)		(17)	
世	ひ	な	そ	や	な	降	で	雲	え
中	さ	で	を	よ	り	そ	あ	は	の
の	き	し	お	や	ね	め	ま	は	そ
あ	お	こ	ち	ま	五	し	ま	れ	こ
つ	ふ	の	か	た	月	日	じ	ぬ	と
か	る	花	へ	き	雨	を	め	五	成
は	山	み	り	な	の	か	り	月	け
し	片	る	け	な	空	ぞ	せ	き	り
さ	山	程	れ	け	(全)	ふ	り	ぬ	(全)
き	陰	の	(全)	御	(全)	れ	(全)	ら	(全)
を	の	心	(新	空		ば		し	
あ	い	に	勅	の		み		た	
け	し	ま	撰	時		づ		ま	
か	お	て	入	鳥		か		衣	
け	つ	て	集	さ		さ		む	
ば	ゝ	て		つ		の		つ	
き	ゝ	(六		き		え		か	
な	(全	月		た		し		し	
る))		に		き		き	
泉				こ		く		ま	

(以下一首にニツ以上の校異あるもののみを示す)	(27)	(26)	(25)	(24)	(23)	
み ^と と	誰 ^し か ^も 水 ^難 なら ^で は ^た く ^べ き ^く ろ ^と の	う ^つ せ ^み の ^い で ^か ら ^く て ^も す ^ぐ す ^か な ^い か	夏 ^の 日 ^も …氷 ^室 を ^冬 の ^か た ^み 成 ^け る ^け り ^り (全)	さ ^え こ ^ほ る ^こ と ^を 氷 ^室 に ^残 し ^を き ^て …(全)	せ ^く 手 ^に は ^涼 し ^き 事 ^も よ ^ど み ^け り ^水 音 ^の み	に ^お も ^む き ^ぬ べ ^し (全)
	み ^と の ^み ま ^し ら ^む ま ^で (全)			さ ^し の ^ほ る ^こ と ^を 氷 ^室 に ^残 し ^を き ^て …(全)	せ ^く 手 ^に は ^涼 し ^き 事 ^も よ ^ど み ^け り ^水 音 ^の み	に ^お も ^む き ^ぬ べ ^し (全)
				さ ^し の ^ほ る ^こ と ^を 氷 ^室 に ^残 し ^を き ^て …(全)	せ ^く 手 ^に は ^涼 し ^き 事 ^も よ ^ど み ^け り ^水 音 ^の み	に ^お も ^む き ^ぬ べ ^し (全)
				さ ^し の ^ほ る ^こ と ^を 氷 ^室 に ^残 し ^を き ^て …(全)	せ ^く 手 ^に は ^涼 し ^き 事 ^も よ ^ど み ^け り ^水 音 ^の み	に ^お も ^む き ^ぬ べ ^し (全)
				さ ^し の ^ほ る ^こ と ^を 氷 ^室 に ^残 し ^を き ^て …(全)	せ ^く 手 ^に は ^涼 し ^き 事 ^も よ ^ど み ^け り ^水 音 ^の み	に ^お も ^む き ^ぬ べ ^し (全)
				さ ^し の ^ほ る ^こ と ^を 氷 ^室 に ^残 し ^を き ^て …(全)	せ ^く 手 ^に は ^涼 し ^き 事 ^も よ ^ど み ^け り ^水 音 ^の み	に ^お も ^む き ^ぬ べ ^し (全)
				さ ^し の ^ほ る ^こ と ^を 氷 ^室 に ^残 し ^を き ^て …(全)	せ ^く 手 ^に は ^涼 し ^き 事 ^も よ ^ど み ^け り ^水 音 ^の み	に ^お も ^む き ^ぬ べ ^し (全)
				さ ^し の ^ほ る ^こ と ^を 氷 ^室 に ^残 し ^を き ^て …(全)	せ ^く 手 ^に は ^涼 し ^き 事 ^も よ ^ど み ^け り ^水 音 ^の み	に ^お も ^む き ^ぬ べ ^し (全)
				さ ^し の ^ほ る ^こ と ^を 氷 ^室 に ^残 し ^を き ^て …(全)	せ ^く 手 ^に は ^涼 し ^き 事 ^も よ ^ど み ^け り ^水 音 ^の み	に ^お も ^む き ^ぬ べ ^し (全)

	(37)		(36)		(35)		(34)		(33)
し	あ	の	う	て	て	る	河	鹿	ま
き	け	物	つ	た	る	む	霧	の	ぶ
よ	ぬ	に	ろ	る	け	ろ	の	鳴	し
に	と	が	へ	る	る	の	煙	か	さ
お	も	有	る	我	を	の	と	は	す
も	と	け	色	身	み	ハ	み	あ	す
が	も	る	を	と	る	島	え	か	さ
は	な	け	ば	思	空	に	て	す	まつ
は	ほ	る	霜	へ	ぞ	は	た	ら	つ
り	秋	(全)	雪	ば	な	(全)	た	ん	ほ
す	風		の	(九	き		つ	(全)	の
な	は		へ	月)	雲		な		笛
(全)	を		だ	う	の		へ		の
(千	と		た	へ	う		ん		声
載	づ		つ	に	へ		な		ぞ
入	れ		れ	こ	に		な		と
集	て		ど	と	こ		み		も
)	野		ば	た	た		あ		し
	べ		香		へ		け		ら
	の		は		た		か		で
	け		我				へ		や
			袖						

(48) 我恋はおぼろの清水いはこえオシてせきやるか

たもなくて暮しつ(全)(金葉集ニ度本入集)

(49) ひひくにゆくことはしかへしにぞきみき(連歌附句)

(50) 須臾も心のオシなぐさむばかり(小決本同じ)(全附句)

以上本写本における校異、それも(28)以後は

一首に二個以上の校異を有するもののを対象

として五十の諸例を抜き出した。この外、詞

書を始め歌の本文の校異一例の場合、また他

本との共通の校異ということになる。その教

では「	田 ^〇	れぬ	「	（	詞書	来 ^〇	リ		は
赤間 ^L	とい	浪ぞ	君こ	現在、	に	る。	の	これ	これ
と	い	立け	ふと	福岡	つ	。例	脱	らの	れ
正し	ふ	けろ	と	県	い	え	落	の	位
い	所	る	さ	宗 ^{おな}	て	は	と	の	の
地	に	と	さ	像 ^{かた}	一	以	を	調	も
名	て	あ	る	郡	つ	上	有	査	の
にな	と	る	袖	赤	の	の	し	の	で
な	な	が	は	間	例	中	て	い	は
つ	。致	その	あ	町	を	には	い	る	な
て	の	詞	か	）	示	あ	る	こ	い
い	本	書	ま	で	す	げ	と	が	の
る	文	は	に	詠	と	な	が	指	の
の	の方	「	て	人	九	か	痛	書	に
に		あ	海	だ	州	つ	者	には	は
		か	に	致	の	た		か	な
		か	し	に	赤	が		な	
			ら	に	間				

(7) 内閣文庫蔵「散木弁致集」(八卷二冊)

本写本は昌平坂学問所旧蔵本である。一丁十行で致は一行書きであるが結句の下部が二行に亘つてゐる。奥書を有しないのでその書写過程は明らかでないがその特色としては、(一)、本文には書名はないが墨と朱を以て校合を加えている。(二)、一度書いた本文の語句を消してその右横

に他本の語句を書きかえた跡をのこしている。
 この点本文としては純粋性を欠いているとい
 うべきである。

(三) 散木集から勅撰入集の歌の上に夫々の勅
 撰集名を記入している。

(四) 雑部以下ニ巻が欠巻である。

(五) 「散木弁歌集」と「弁」の字を用いている少
 ない本の一つである。

(左に校異などの記入個所の文献写真を
 示す。)

以上の如くその書き入れは必ずしも統一し

書き入れである。(枝異ではないが)

(四) 「玉葉」とあるのは「玉葉集」入撰を表示した

く只右側に示しているもの。

(三) 「成ぬらん」は「その杜の成行みれば」の如

の。

(二) 「さびしきく」の如くみせけちの形をとつたも

(一) 「紅葉を」の如く挿入の形をとつたもの。

統との対校である。その書き入れ方法は、

この校異の書き入れは、何れも群書類従本系

ていまい。
そこに書写者の私意の加わった点
などみうけられ写本としての純度が稀薄にな
つてくるのである。

次に本写本の本文上の特色をあげておく。

まず大きな脱落としては次のものが指摘され
る。(他本と普通のものも含む)

(1) 吉野山みねの楠はたかけれど今朝は霞にう

づもれにけり(正月)

(2) 左注「はしがきにさとをばかれずとかけり」
L

(大野本・三手本同じく欠く)
(三月)

(3) 「返し」(春のゝちは君がなげきに……)の題詞

(二月) (神宮甲本も全じく欠く)

もろとも今ぞ鳴なるほととぎす 八声の鳥

(4) はそのがつまかは (五月) (神宮甲本も欠く)

(5) 「返し」

「人はいさわれはよひよりあふ坂の夕つけ

鳥のねそのみぞなく」(全)(題と歌共に欠く)

(6) 詞書「秋の山の月をみるといへる事をよめ

る」(九月)

(神宮甲乙本、小沢本、岸本本も欠く)

た も ち た る 人 な ん む ま る と い ふ 事 を	及 び そ の 次 の 歌 の 詞 書 「 そ の 蓮 に は 戒 を	花 み る よ し も が な し (歌 教 部)	(10) 思 子 こ と 三 の お し へ を と り の へ て は す の 初	(9) く み の り か な (悲 歎 部)	(9) 涙 を ば 硯 の 水 に せ き れ つ 、 胸 を や く と も か	な し 。 (今) (神 宮 乙 本 、 小 沢 本 、 三 手 本 も 同 じ)	(8) 題 詞 「 か へ し は あ る が 、 そ の 作 者 名 「 經 兼 」	な し 。 (別 離)	(7) 題 詞 「 か へ し し 及 び そ の 下 に 作 者 名 「 加 賀 守 」
--	--	--	--	---	---	---	--	---------------------------------	---

(11) 左注「みづきといふはつくしのふのかどでな

り^L(恋部上)(神甲乙、小沢、岸本、大野、三系、尚舎の各本同じ)

(12) 題詞「海路恋^L(恋部下)(神甲、小、岸、大、三、尚の各本同じ)

(13) 浅からず思へばこそはほのめかせほりかね

の井のつゝましき身を(全)

(14) 題詞「大感長実の八條家にて恋の心を^L(全)

(15) 作者名「ゆりはな^L(神祇)(尚宮本同じ)

(16) 人はいさ光のすぢをしるぞともおなじ仏や

しらばしるらん(釈教)(神甲本も同じ)

以上十六例のうち本写本のみの脱落は(1)(5)

(7) (9) (10) (13) (14) で、他は諸本共通の脱落。本書のみ

の脱落は書写の時の書落としであろう。

次には本書に於ける主な部分的語句の相違

のみの校異をあげておく。(詞書と他本との共

通のものには有畧。但し歌については他本でも関係あるものは校異を

示しておいた。

(1) 子日してよはひをのべに雪ふればど……(正月)

(2) 鶯は春待ちつけていつしかの杜のたまたまへに

こゑならす也 (全)

(3) やさしかやしがししきしななのしとねにちりそむる……(二月)

(4) 秋刈りしむろのをしねを思ひ出て春ぞをたな

みに種もかしける (三月)

(5) けふくればしどろにみゆる山賤のおどろりか

みも葵かけたけり (四月)

(6) あふ事はをしとの底の今宵しもめをもみせつ(尚大も)

れ(諸本)ば(多し)く(い)る(大三尚)にや有うん (五月)

(7) さばへなるあさあさきぢをかり人となし(神田本も)に人なして厭ひし

身をなづるをがけふかな (六月)

(8) 咲そむる萩をがたちかくせ女郎花しのをす

きめもぞきたなき (八月)

(9) その はらや ふせや に思ぶさをしかも……(全)

(10) 吹風にあたり雲の空をはらはせてひとりもあ

中む(岸・神甲乙・小も)ぶ秋の月かな (全)

(11) てる月のたびねのとこやしもといふかつら

き山の谷風のかほ水 (九月) (千載集入歌)

(12) いかばかり秋の名残をながめましけさは木

のほに時雨降ずすな(神甲本も)は (十月) (千載集入歌)

(13) 時雨をするはしたの山は(諸本多し)のみち葉の色づくほ

13 どのななこそにこそ有けれ (全)

<p>の宿に万代をませ <small>ます</small> (全)</p>	<p>(19) あおよりもあをくそめなす色もあれば千年</p>	<p>(18) かすが山いはねにーい <small>万代</small> <small>(神甲也)</small> のしるし成らん (全)</p>	<p>(17) そま河をたれそのかみにせき初<small>と</small>めてー (祝部)</p>	<p>も<small>も</small>と<small>と</small>ろはにふれる白雪 (全)</p>	<p>(16) いと<small>い</small>いしくしどろにみゆるかるかや<small>を</small>のうれ</p>	<p>やけさはお<small>こ</small>る<small>ふ</small>らん (全)</p>	<p>(15) 雷子れば<small>は</small>青葙の山もみたくれてときはの名を</p>	<p>もまたおこす計ぞ (十二月)</p>	<p>(14) 炭がまの口あけつれ<small>は</small>いは<small>は</small>ず<small>と</small>もひをへて <small>はてたれ (諸本多し)</small></p>
---	---------------------------------	--	--	---	---	---	--	-----------------------	---

20 まさみのくまはなつ日ぐれは別るともしづの

みなはにあはざらめやは (全)

(21) 今はとてかへる心はまどへどもむまよりこそ道

はたどらざりけれ (悲歎部)

(22) 名にしおほはとふいしうじなわたの都鳥心づくし

のかたはそとふこども (全)

(23) 止めよとしろくいへども折ふしのあしわがけ

にても過しつる哉 (全)

(24) なきながす袂てにかけはあやめ草ねもすみぞ

めにうつれとぞ思ふ (全)

	(29)		(28)		(27)		(26)		(25)
糸	み	し	さ	ぬ	誓	さ	へ	に	お
の	空	か	い	物	ひ	は	だ	宿	ひ
こ	に	き	が	に	を	り	て	ら	た
の	も	つ	に	ぞ	き	成	な	ま	ち
し	吹	く	の	有	て	け	き	し	し
た	か	方	い	ける	み	る	弥	や	程
風	よ	を	と	る	ち		陀	は	を
は	ふ	し	さ	(全)	び	(全)	の	(釈教)	し
(全)	ら	ら	る		く		光		ら
	う	ば	身		人		に		ず
	し	や	と		の		つ		は
	お	(全)	は		隙		み		か
	ほ		な		な		人		り
	く		ら		き		の		に
	ち		ず		に		心		て
	の		と		光		の		も
	ま		も		も		く		草
	か		し		た		ま		の
	み		ば		え		ぞ		庵
	か								

ナシ

らん(諸本多し)

ナシ

ナシ

こそいまの

(30) 文みすときくにつけてもうたしめのはした

なきまでぬる袖かな (恋部上)

(31) 春たてばめぐむ垣ねのみやつこきー (全)

(32) 水の海とおつる涙は成にけりあふべきしほ

もなきときより (全)

(33) 我袖をひぢがさ雨にそぼぬれてさほすとい

はん君 ぞおこる (全)

(34) 他つゝも頼めだにせよ恋しなん後の世まで

も慰めにせん (恋部下)

ゆゑ大野本系統の諸本と共通した校異を加わ

ないといふことであつた。以上のほかにい

と対校して本写本独自の語句の相違は筆外

調査の結果から考えられることは群書類従本

以上本写本から三十六の校異を抜き出した。

手にもかゝらず
(全)(金葉集入歌)

(36) 思ひ草はずゑに結ぶ白露のたまくきてはも

いひそしいひしばしいひしもいひしらさじ
(全)

(35) よの人はとひ慕ふともすまぎらばみきとなて

えると実におびただしい数に上るが、それは
一印省略した。(一首の中に本写本独自のもの
があり同じ歌に他本と共通するものがある場
合のみ参考に示した。)以上のうち部分的脱落
は(18)(27)(29)の三個所で、千載集入歌の(11)(12)は異
訓になつてゐる。本書は校合書き入れも多い
のであるが、先にも述べた如く私意を以て加
えられた節もみえ、本文内容としては多少純粋
性を欠く面がある。以上のことなどが本写本
の特色といえる。

過程も不明。昌平坂本に近いとはいふものゝ

色はない。奥書を有していないのでその書写

蔵)に近い関係にあり、本書自体としての特

印がある。本文としては昌平坂本(内閣文庫

を用いた一本である。「尚舎」ル「源忠房」ルの

本写本にも奥書はない。歌集に「弁」ルの字

「散木弁歌集」ル(八卷二冊)

(8) 国会図書館上野分館蔵

昌平坂本の如き歌の脱落もないのであつて、

次に本書の脱落と（他本をも含む）みると

左の通り。

(1) 諸の花くさぐさにさきみだると

いへる事をよめる

そこばくの花のひもとく庭の面にをしのけ

たるははちすせけりし（釈教）（詞書と歌）

（右を久くのは神甲乙・小沢・岸本・昌平坂の各諸本）

(2) 左注「みづきといふはつくしのふのかどで

なりし（恋部上）

(右を欠くのは神甲乙、小沢本、岸本、大野、三手

・昌平坂の各諸本)

(3) 題詞「海路恋」(恋部下)

(右を欠くのは神甲乙、小沢、岸本、大野、三手、昌

平坂の各諸本)

(4) 「紅の袖にはづれしまみよりもなれがつら

りのわらけをぞ思ふ」(恋部下)

及び、その次の歌の詞書「修理大夫題本

の六條の家にて恋不知程といへることとを

よめる」を欠く。

(右の致と詞書を欠くのは昌平坂本)
以上四つの脱落は、いずれも本書のみの特色ではなく、いずれも他の諸本と共通した脱落であり、最も近い関係にある昌平坂本よりも脱落は少ない。こうしたことから部分的な語句の異同も大方他本と共通しており、本書自体の特色はない。従ってこゝまでの諸本の如き部分的小異の例は省畧する。要は、本写本は大野本系統本に位置づけられるが本文としてには独自の特色をもたない本といえるのである。

一丁十三行。款は一行書きで奥書がある。
今、伝本に欠する部分の奥書を示すと次の通

り。

本云

仁平四年正月十九日未時殊以彼家自

筆本書寫了一校了（中畧）

宝治元年九月廿七日於燈本令書寫訖此本

者故題昭法橋自筆云々片仮名横切一帖厚

雙紙也。披閱之間依有煩書分三帖了。但題

昭文書等讓與弟子印雅々々同宿故幸清法

印房終焉之時印雅讓幸清々々入滅之後故

超清法印伝得超清持両妻之間彼是相爭散

々云々。不慮之外伝備件本書寫了。但日

々無余暇夜々勵筆功仍筆跡狼籍可察老眼

也。

六旬有余翁 在判

右之奥書者或本ニ載之仍于此書加了

寛文十七十九

L

とある。これによると本書の原本は仁平四

年正月十九日、俊頼の自筆本から書写したも

のか、或いはまたその転写本を寛文十年に書

写したといふことになるのである。さすれば
本写本は原本からいえば孫本といふ極めて近
い関係にある貴重な散木集の本文といふこと
にもなるのである。但し、この奥書の「宝治
元年……」以下は原本にあつたものではなくこ
の書写者が寛文十年に書き加えたものである。
この追加奥書により題眼自筆本なるものの
存在が知られるのは注意すべきであるが、今
日この自筆本又はその転写本も見ることには出
来ない。この書写者は「宝治元年……」以下

奥書を寛文十年書写するに当たり「或本」に
 載つていたのを書き加えたのである。以上の
 如く本写本の書写過程は俊頼自筆本の孫本にあつた
 り。また一方題照自筆本もあつたらしいが、い
 ずれにしても多くの散本集の諸本に比してそ
 の書写階梯の極めて少ない本である。
 次に、書陵部本の本文についてであるが「
 神祇」の部に八首の脱落のあるのが一つの特
 色である。その外は欠款もなく詞書にも脱落

はななく最もすぐれた江戸初期になつた写本と

いうことが出来る。

「神祇」の部は散本集中歌教が僅か21首で最

も少ない。脱落歌はその後半部のところには8

首ある。それを示すと次の通り。

(1) 「左京大夫経忠の家にて社櫻といへることを」

けふみれば花もすきふに成にけり風はいな

りにふくとみれども

(2) 「前斎室の閑院におはしましける頃月のあか

りける夜まゝいりてみれば……(以下畧)

(5) きさ
 さら
 ぎの
 はつ
 さる
 なれ
 や
 春日
 山
 みね
 どよ

春日祭

の
 ねぐ
 ら成
 けり

(4) 神
 葉を
 神の
 みむ
 ると
 あが
 むね
 ばゆ
 ふつ
 け鳥

神を
 よめる

に
 ゆき
 てい
 のら
 ば

(3) あ
 まく
 だる
 神も
 しる
 らん
 思子
 こ
 と空
 しき
 杜

か
 へし

ゆ
 りは
 な

の
 はよ
 いか
 にぞ
 や

思ひ
 かね
 社も
 みえ
 ぬ杜
 に来
 てい
 のり
 しこ
 と

の
嬉
し
げ
も
な
し

(8) 君を
とは
いな
りの
神に
祈ら
ねば
しる
しの
杉

返
し
扇の
つま
にか
けり

と
思
ふ
は
か
り
ぞ

(7) 人
し
れ
ず
いな
りの
神に
祈
る
らん
し
る
し
の
杉

福
荷に
まい
り
たる
人の
杉を
こ
ひ
け
れば
……
(以下畧)

神
の
か
ざ
り
成
け
る

(6) 引
つ
れ
て
渡
る
け
し
き
を
来
て
み
れ
ば
い
つ
き
て

加
茂
祭

ま
ま
で
い
た
ゞ
き
ま
つ
る

(次の歌の詞書の中途まで脱落)
 この脱落について南根慶子氏は「落丁では
 なく一丁の表と裏との間に存するのである。
 故にこれは原本仁平本の落丁か又は図書寮本
 の書写者が元本の紙を二枚重ねてめくつた爲
 か何れかであらう。」(「散木奇歌集の研究と
 校本」P.6)と言われている。おそらくそうであ
 るう。尚本写本には散木集の後に「基俊集」
 の大部分を加えて同冊としていいる。大部とい
 ったのは類徒本の「追考出」(歌員14首)がな

いだけで後は「基俊集」の巻頭「正月朔日女の
もとにつかはしけり」から「君といへばなど」
みまほしき波まなる沖っ小じまの浜椒かな
までの歌が全部同冊となつているのであつて
本文も類従本と全く同じである。しかし「
基俊家集」という標題もなく、いきなり「
俊家集」の本文の巻頭題詞から始まつている
。これはまさしく乱丁ともいふべきであり、
俊頼の散木集とは内容的には全く関係はない
のである。肉俵のない「基俊集」が合冊された経

緯について若干述べておく。

書陵部には四本の基俊集が所蔵されているが、その甲の二本は先にふれた散木集合冊の部分の最後「君といへば……」の歌の次に、左の如き奥書をはさみ込んでいる。

「茲散木集貳冊目儂洞新本謄写出后毎輪直依禁裏古本校正焉蓋自正月一日基俊家集也。夫俊頼基俊之二士同世而生同道而立其名鳴于一時其統伝于万古可謂侔歌之仙矣。今合二集為全書聊欲有助觀覽而已

戊寅臘月七日

藤譚玄

以後致はまたつづけているが、藤譚玄なる人は、俊頼・基俊の時代を尋しくするニ致人の致を一冊の全書として観覽の一助にしよう」と試みたのである。ところがその後この奥書などの脱落した写本もあつてその間の事情も不明のまゝ、遂に基俊家集が散木集の中に入り込んでしまつたものであろう。それに今一つ竹柏園藏に「散木集脱漏」といふ一本あり、これにはやはり先の基俊集の部分が見所収され

同じく譚玄の眞書が別紙に貼付けてあるとこ
 ろから、これを眞実の「散木集脱漏」と誤解
 される面もあつて寛文十年の書写者も不審と
 は思いつゝ書き加えて現在見る如き乱丁が起
 つたのであろう。このことは散木集内容には
 何ら關係は有しないが写本形態の上から書陵
 部本「散木奇歌集」の他に見られない特色とい
 うことが出来る。

次に本写本のみの歌の本文校異を示すと左
 の通り。(詞書は省畧)

まし^ひらむまで (六月)

(8) 夕されば野べもや物を思ふらん...露じめ^{セリ}り (八月)

(9) 秋の田のあぜふみしだきなく底はいなむし

ろをやし^{しきてふすらん}き思らん (全)

(10) 衣うつきぬたの音に夢覚てことぞ^{こそ}ともなく

ぬるゝ袖かな (全)

(11) にごりなき^えみのもに月のやどらずばいかであ

さぢの教をしらまし (九月)

(12) 君が代はおほはつせぢのも^{ナレ}ゝえつきもゝえ

ながらもさかへますかな (全)

(13) たちかへる都にだにも引かへてうしと思ふ

事なからましかば (悲歎部)

(14) 住吉の千木のかたそぎゆきもあはで霜をき

まよふまがふ冬はきにけり (神祇) (新後拾遺入集)

(15) いとゞしくきどの玉江たまの光るを (歌教)

(16) たがためなをざりごとあみたぶにあみた仏と (全)

(17) おかみ河ねしろたか高しかやふみしたき (恋部下)

(18) 身の程をもて宴せども君みてはめでもやす

るとあざれをぞやすくする (全)

(19) なく涙おそふる袖は (全) 色見ゆのみにや人は見るらん (全)

(20) し く ち 引 く
あ こ の は 山 はまゆ に 年 ふ り て …… (雑部上)

(21) よ し 野 川 岩 の ナレ お せ き を わ き か へ り し ら ゆ ふ

玉水(大・三・岸・小・鳥丸各諸本も)

花 や 瀧 の 白 玉 (全)

(22) 嬉 し さ を き か す る 程 は こ の つ の 牛 の …… (全)

なみ(大・三・小・岸の諸本も)

(23) 春 風 に な ど や お り け ん み ち の く の ま が き が の

島 の 梅 の 花 貝 (全)

(24) 燕 丹 が 深 意 を 尽 せ ば そ 樊 籠 期 も 首 を 蘇 よ け レ

い む (全)

(25) た め み 置 る い は 間 を す ぐ る 決 河 お び た ぞ し

く も た ぎ る な る わ な らん (全)

(34)	(33)	(32)	(31)	(30)	(29)	(28)		(27)	(26)
祝	く	し	論	う	あ	こ	と	あ	何
ひ	ほ	い	議	か ^レ	ら	ゝ	思	や	事
を	た	れ	を	ら	う ^ふ	の	ひ	ま	の
き	も ^レ	も	ば	め	と	つ	け	た	忍
し	か	う	み	は	み	の	る	ぬ	び
思	く	や	そ	う	れ	ち ^み	か	花	が
ひ	や	と	ひ	か	ば ^{ど(小岸も)}	の	な	の	た
の	く	か	し	れ	く	声		都	き ^レ
如	ほ	ほ	を	て	ろ	遠		を	に
く	な ^{ナシ(間宮本・岸本本も)}	に	に	宿	き	く		ら	初
し	ら ^{うた}	か	ぞ	も	と	き	(今)	の	雁
め	ざ ^ら	ら	し	さ	り	こ		れ	の
の	む	れ ^レ	たり	だ	か	ゆ		か	ー
う		る ^レ	け ^{ナシ}	あ	な	な		ら	ー
ち			り	ぬ	り	り		う	(今)
に			け ^レ	か	か	(連		き	
ー			る ^レ	か	な	歌)		京	
ー				か				な	
(祝								り ^{なる}	
部)	(今)	(今)	(今)	(今)	(今)	(今)			

以上類従本を底本としての校異三十四個所
 を示したのであるが、これに諸本共通の詞書
 ・歌の本文の校異を加えると更にその数は多
 くなる。先に見た全体的脱落歌が八首あり、
 これは落丁ではない。今部令的小異を抜き出し
 て言えることは、(一)本写本に若干の脱字のある
 ことである。(11) (3) (10) (12) (21) (24) (30) (31) (33)の九例がそ
 うであり、(二)歌の意味から誤字と思われも
 のに(7) (15) (18)の三例がある。本写本の形態的特
 色は勅撰入集歌については上に勅撰集名を記

についてには以上のような形で示している。

要するに、書陵部本は仁平本の謄本として他の諸本にみるような歌の配列上の異状もななく、また詞書の不当な点もなく若干の欠陥はあるにしても最もすぐれた善本と云うことが出来るのである。

右の文献写真で見ると通り一丁十一行。歌は	一行書き。本書も勅撰集、その他の集に入集	してゐる歌の上にはその入集した歌集名を書	きこんでゐる。本写本には次の奥書をもつ。	散木集十卷以師翁写本書写之維時文政十	年晚秋下旬命重賢書写之而后再三校合了	至初冬望後落成以識其由	源	轅	以師翁校本一校畢	此本今 水戸家へ献上彼御文庫ニアリ	文久二年三月廿八日功畢	間宮永好	これによると、
----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	--------------------	--------------------	-------------	---	---	----------	----------------------	-------------	------	---------

(一)、源頼朝が師翁の蔵していた写本を以て文

政十年の秋下旬重賢に命じ書写せしめ

その後再三校訂を加え初冬に至つて成

つた本であること。

(二)、その後、間宮永好がこの本を入手しそ

の師小山田興清の校本によつて校異が

施された本であること。その校異の終

つたのは文久二年三月廿八日であつた。

という書写校異の段階の経緯をもつ。即ち、

この本はまが頼朝が書写し、校異の書入は頼朝と

はまた注意すべきことであつた。永好のいう	この師弟二人が散本集研究家であつたこと	興清と共に八洲文藻を編纂した国学者である。	はその門下。水戸の人で齊昭公に仕へ小山田	向宮永好（文化二年（1805）—明治五年（1872）・68 ^才 没）	に聘せられ彰考館和書局に出仕した国学者で	は武蔵の人。春海に師事し四十九才水戸齊昭	小山田興清校本に拠つているのである。	永好が施している。この時の永好の書入は小
----------------------	---------------------	-----------------------	----------------------	---	----------------------	----------------------	--------------------	----------------------

師翁校本とは興清の書入れた本であり、水戸
家に献上したものでこれは群書類従の本文を
有する散本奇蹟集であつたのである。

本書第一冊見返には永好の識語がある。そ
れは次の如く複雑な校異の過程を辿つていろ。

墨と朱とを以て傍に書けるはもとより此
本にありける也。サと記せるは故翁本に

藍を以てものせる也。イと記せるは異本

也。△と記せるは故翁本に書名なきもの

也。ルと記せるは群書類従。墨と記せる

はルの異本也。○と記せるは墨にて故翁
 本に校せる也。但書名をあげず。□と記
 せるは故翁本に墨にてイと印せる本。
 これによつてみると、本書には永好が入手
 する前にすでに墨と朱を以て校異の書入れが
 存していたのであり、永好は更に以上見る如
 く種々な符号を用いて類別を試みてゐる。尚
 その外にも「契沖本」と注した補入款の書入
 れもあり、永好は與清の注記考証も写してい

るから永好本はそのまゝ
興清本の形をも残存
せしめており、その点この
一本で両本をみる
ことが出来るという便利
さを有していること
になるのである。

次に諸符号を中心に先に
貼付した文献写真
の個所の書式を具体的に
説明すれば左の通り。

(一) 墨と附したものの
(興清本に既に記入のもの)

一行目に「袖に尽す身付墨也を」
(款)

(二) △の符号
(興清本に校異の書名なきもの)

五行目に「詞書」
山里にて帥中納言

源△

「 ひ と 夜。 」 の 右 に 世 々 な ど を 書 き 込 ん で い る。	考 考 と し て あ げ て い る。 ま た、 「 み ぶ 」 に 「 生 」	「 貧 道 集 三 」 や 「 白 氏 文 集 」 な ど の 歌 や 詞 を	な お、 校 異 で は な い が こ の 丁 で は 上 欄 に、	「 こ れ は、 イ 本 に 」 に 「 の あ る こ と を す で に 與 清 が 記 入 し て い る こ と を 示 す。」	七 行 目 「 い そ あ み み け る セ 夕 を 」 （ 歌 ）	(四) 「 イ 」 の 符 号 （ 異 本 を 示 す も の ）	二 行 目 「 み ぶ に 侍 け る こ ろ 」 （ 詞 書 ）	(三) 「 〇 」 の 符 号 （ 與 清 の 墨 で 校 訂 し た も の 。但 し 書 名 は あ げ ず ）	六 行 目 「 詞 書 」 「 歌 」 よ ま れ け る に 」
--	--	--	---	--	--	--	---	---	---

以上の如く間宮本の校異は複雑な段階を示すもので、大方その校異は群書類従本以外の諸本との対校で（諸本の名は示していないが）あることが知られる。

水戸学を支えた師弟二人が散本集研究にかくも熱心にその校異は季細を尽しているのであるが、本文からいえば類従本系であり、間宮本は類従本・弘綱本・国歌大系本・京大本・（織部本も近いのか？）等と共通する左の如き誤謬をもっている。

(1) 詞書「ならの歌合に人にかはりて」(五月)

これは「ほととぎす鳴うれしさをつゝめど

もも袖には声もとまらざりけり」といふ「永

縁奈良房歌合に作者中納言君俊頼の孫殿

縁のこと」の名で出詠した俊頼の代作歌で

当然この詞書のあるのが正しい筈なのにこ

こにはなくて一首べだてた「今こそはふた

むら山の時鳥」の詞書に「ならの歌合に人

にかはりて」郭公不乞といふ事を」と前半に

混入してある。「今こそは」の歌は勿論「

永縁奈良房歌合^レにはないのである。書陵

部本を始め大野本系統の諸本はかような誤

謬は冒していない。これは向宮本のみので欠

陥ではなく類従本系統の誤謬なのである。

(2)

秋部八月の左の詞書と歌とが脱落。

○詞書^曙に度のまぢかく聞えければめづら

しさによめる^レ

○あさ戸あけてたちいづる底の声きけば^跡

つかひにもきたりけるかな^レ

本写本に於ては上欄に^契沖本。異本^レと

注しこの詞書と歌とを記入してゐる。

(3) 「わきかへりなみぢへさそふたきつせにた

へてもたてるいはまくらかな」(雑部上)

右の歌脱落。但しこの歌の詞書「をとははに

まかりて瀧のもとにて人々かはらけ取て歌

よみけるによめる人のもとに数多居なみて

夜更ぬるよしをよめる」のみは存してゐる。

(この歌は書陵部本・小沢本・烏丸本・大野本・三

手本等にはある。)

(4) 連歌 「法橋なりける人のこの比人にいはる

、事有けるをたはふれて、隆淳阿闍梨

までにはあるが肝心な隆淳の句（前句）

○まことにやのりのはしよりおちにける

が脱落。（書陵部本・大野本・小沢本・三手本・烏丸本にはある）

以上が間宮本を含めた類従本系統の脱落個

所である。次に間宮本のみが脱落をあげると

左の歌一首（詞書を含む）のみである。

○ 又田に鹿のなくを聞てよめる

秋の田のあぜふみしだきなく鹿はいなむし

ろをやしき思ぶらん

散木集からこの一首の脱落は他の諸本には
その例もなく間宮本の特色というこゝとが出来
る。次にこの丁の文献写真を貼付し、その書
き込みをみてみよう。

この丁には先の(2)の諸本共通脱落と本書の
 みのこの脱落歌の二個所あり、後者を(2)より
 も更に大きく補入の形で書き加えているのは
 永好が諸本を見てのことであろう。本書はその書
 写過程、本文内容から大野本系統に近い語句
 が多い。これを類従本を底本として校異を施し
 てみるとかなり多くの教を抜き出し得る。詞
 書及び諸本との共通の語句を別にして本書の
 みの校異は筆者の調査では119例(連歌4句を
 含む。但し長歌は除外)という多くの校異個

(8)	(7)		(6)		(5)		(4)		(3)
も	山	も	柴	れ	卯	有	い	咲	今
が	里	お	の	ぬ	花	と	と	け	年
り	の	な	の	物	は	や	し	ば	よ
舟	こ	な	産	に	は	鳥	く	ち	り
お	や	じ	に	に	い	の	を	る	ー
と	の	梢	あ	ぞ	は	鳴	の	ー	花
す	え	ぞ	ま	有	は	ら	お	心	の
う	び	に	や	け	こ	む	あ	し	ゆ
船	ら	え	ど	る	す	(り	づ	か
の	に	む	り	(浪	三	か	か	り
み	も	ら	せ	四	に	月	へ	に	に
な	る	(よ	月	か)	や	よ	と
れ	月	五	郭)	ほ	郎	る	き	は
ざ	の	月	公		れ	(す	す	る
ほ	ー)	か		と	次	ぐ	ぐ	と
さ	ー		よ		も	郎	さ	さ	思
し	(ふ		お	百	ば	ば	へ
て	六		か		あ	首	や	は	ば
も	月		き		る)	(全	全
い)		き		て		全))
か			ね		は		工		
					ぬ		に		

(14)	(13)		(12)		(11)		(10)	(9)	
雲井にてかみなき人のしな <small>し</small> ら <small>し</small> ば <small>し</small>	あたりをばなをほのめか <small>ナレ</small> せ <small>ナレ</small> 神かきや <small>ナレ</small>	まは <small>あり</small> お <small>あり</small> か <small>あり</small> まし物 <small>ナレ</small> き <small>ナレ</small>	古を思へばくやししめのうち <small>ナレ</small> にさかさす	らし <small>め</small> め <small>め</small> に任せてぞみる <small>ナレ</small>	い <small>つ</small> つ <small>つ</small> より <small>つ</small> のちかひ <small>つ</small> ならね <small>つ</small> ば <small>つ</small> 君が代をおほた <small>つ</small>	ひに雪散ぼひて <small>ナレ</small> 十一月 <small>ナレ</small> 次郎百首 <small>ナレ</small>	紫の御 <small>さ</small> かり <small>か</small> りはゆるしまし <small>ナレ</small> ろなるくちのはが <small>ナレ</small>	ころもうつ <small>ナレ</small> こと <small>ナレ</small> ぞ <small>ナレ</small> とも <small>ナレ</small> なくぬる <small>ナレ</small> 袖かな <small>ナレ</small> 八月 <small>ナレ</small>	に <small>デ</small> は <small>ナレ</small> や <small>ナレ</small> きな <small>ナレ</small> る <small>ナレ</small> ら <small>ナレ</small> ん <small>ナレ</small>
(親教)	(全)	(全)		(神祇)					(六月)

(15) たぐひなみ老のうちにおさまりておさまりて教の外に

やもれんとすらん（秋教）

(16) いりがたき人も…のぞむ老ぞさほらざりける（全）

(17) 思ふには空をまなどかとはとざらんみだの光ぞ…（全）

(18) めづらしくたてし誓ひの…ひきおてきませけの絶ぬまにへ（全）

(19) いささめにあはれと見をませさせときまつと…（全）

(20) かつしかのおさ田のをしねをきたれて…（全）

(21) したひくる寒のやまこの旅にても身のくせくま

なれや夕轟きは（恋部上）（千載集入）

以上	(32)	(31)	(30)		(29)		(28)		(27)
119	みち	谷川	朝	る	何事	は	み	は	我
個所	す	の	い	物	も	い	狩	た	心
から	お	の	で	に	も	つ	す	い	千
し	ら	心	に	ぞ	思	か	る	ひ	々
ぼ	ま	ぼ	き	有	ひ	た	い	た	八
つ	も	そ	ぶ	け	い	た	ぬ	す	千
て	り	さ	の	る	いた	ゆ	だ	ら	種
こ	さ	に	豊	…	ら	べ	に	に	に
こ	い	か	み	(ぬ	き	か	(お
に	は	き	き	全	世	(け	全	も
例	いた	た	の)	の中)	じ)	へ
示	たま	え	み		に		せ		ど
した	ふ	て	か		身		こ		も
32	れば	(へ		は		な		な
	は	連歌	し		あ		は		り
	(歌	…		ま		や		は
	連歌	附	(り		思		つ
	附	句	全		ぬ		ふ		る
	句))				心		み
)								

ケフ

例の持つ意味はすべて脱字或いは誤謬と筆者
の判断した校異であるといふことである。こ
れによつて知り得ることとは本文的には丹念な
書写過程を経て類従本系統本とも異なつたも
のを有してゐるのであるが、局部的にはかな
りの語写が多かつたといふ結論に達する。こ
れが間宮本もつ欠陥であつた。

(11) 静嘉堂文庫蔵「散木弁歌集」(一冊本)

本写本は、同じく静嘉堂所蔵本で「弁」の

字を用いている。一丁十行。歌は一行書き。

但し雑部ニ巻のみの一冊本である。本文の終

りに「在江戸中一覽之次手以他本聊令校合是

役名を正し侍る(侍るの字不鮮明)季鷹」と

あり、さらにその後には、

「天保九年十月八日写之了判

借乞源黄門

建(小書キ)通卿

本令書写校合

天保十年二月上旬左中弁

の光印政

同月一見付紫同年十一月一覽

弘化四年冬一覽

嘉永元年夏凌暑熱一覽

と奥書はつづいてゐる。これによつて知られ

ること、まず上賀茂祠官加茂季鷹(宝曆二

年—天保十二年 90才没)が江戸在住中に校合を

なし、その本を久我建通が借りてさらにこれ

を校合し、天保十年鳥丸光政がまた書写した

という過程を経た本である。但し何本を以て
 校合したかについては明記していない。ただ
 本文からみて連歌の部に、
 ○まことにやのりのはしよりおちにける
 の一句を有しているところから大野本系統に
 属すること本明らかになつてくる。(この句類
 従本には脱落)しかし、本文の字句には誤謬
 も多く、雑部ニ巻のみでもあり本文資料とし
 ては価値が乏しい。こゝれが烏丸本の実態であ
 る。従つて本文校異は省略した。

(12) 刈谷図書館蔵「散木棄歌集」(十卷三冊)

本写本(次の頁の文献写真参照のこと)の本
文は一丁十行書き。歌は一首一行書きである。

本写本とすでに刊本の項で述べた村上忠順

の「散木弃歌集標注」とは密接不離の深い関

係を有している。そのことについて若干述べ

ておこす。

まず、本書の構成についてみるに(一)「
於富

(二) 刊本「散木奇歌集標注」にも忠順の自序がある	の如くであるが、内容には全く関係ない。	(D)	(C)	(B)	(A)	
	忠順	いとまのみまのなれば	校訂せし本を	校へ正さむの心	刊本	
	忠万左	いとまのみましなれば	校正せし本を	校へ訂さむの心	写本	
		全	四下ウ 末行ウ	四下オ 第一行	三下ウ 末行	場所

殆ど同じ。小異を示すと、

ている。「新泥」の本文については刊本と

新泥^L（刊本では舞^oが無^oになっ^てい^る）が附され

り本写本にもあるが、この自序の内容にはか
りりの相違が見られる。その相違の原因は何
か。それは三冊束の本写本の序が初稿である
からで、この初稿を忠順は同じ刈谷の志士松
本奎堂に批正を求めてようやく刊本の序が完
成されたのである。この経緯については刊本
の項に記して述べたのでここではくり返さない。
本写本の自序が刊本のそれと相違している
のは当然なことで、そのことは忠順の散本集
研究の過程を示すものに外ならぬ。

かくしてこの三冊本の本写本が刊本「散本
 弁歌集標注」の原稿本となつたのであり、こ
 こに本写本の位相がある。
 ところで本写本の校訂のことについても本
 文の終りに「群書類従二百五十四卷奥書、右
 散木奇譚集以織部正乗尹本校合了」という識
 語がある。これは至つて簡単な識語であるが
 本写本の校合についてはずでに刊本のところ
 で述べた通り「於富舞泥」の中に「極齋所蔵の
 古本も底本として校訂した本を入手し、類従

以上の校異が十巻全巻にわたつて施こされ
 ているのである。しかも上欄には款についで
 の解釈、考証が所狭きまでに書き込まれてお
 り、刊本また同じ。(その原稿が本写本であ
 るから)。校異は凡そ大野本系統の諸本からのも
 のであるが、ここに注意すべきことは、築瀬
 一雄氏によつて忠順が散本集の本文校訂に使
 用した本が、同じく刈谷図書館に現蔵されて
 いる四冊本の「散本弁歌集」であることとを調
 査報告されたことである。(『国史と国文学』昭和四十年八月号)

筆者も刈谷図書館を探訪し調査したのであるが、築瀬氏の学恩を有難く思つている次第でこの事についで若干述べておこう。

(13) 刈谷図書館蔵 散本章歌集し (十卷四冊)

本写本も本文一丁十行書き。歌は一行書き。

(文献写真参照) 字体は三冊本よりも流暢である。

さて、本写本の特色としては、校訂に關する奥書が四冊の各冊ごと、その末に朱書で書か込んでいることである。その筆は葉山信果である。次にそれを示す。

(第一冊)

以古鈔本 稱一本者是也 及塙氏群書類従本 稱塙本者是也 校勘了

天保二年仲秋 况斎 岡本保孝

同 十二年晚春 篤齋 葉山信果

(第二冊)

天保十二年晚春校合了 信果

(第三册)

以古本塙本校

此本欠卷九以下今以古本補之附于後

此原本及古本並校番狩谷先生所藏

天保二年仲秋

岡本保孝

天保十二年晚春

葉山信果

(第四册)

以塙本校了

塙本卷末云

右散本奇譎集以織部正乘尹本校合了

なお、本写本の第四冊目の末尾に奥書があり、その本文は刊本と全く同じ。(この事についてはずでに(一)刊本の(3)に文献写真を貼付し説明しておいた。)

さらに忠順は、その奥に本写本の校合の経緯について書き込みをしている。(写真其の五)

(これについては後述する。)

また続いて本書の奥書には

「天保十二年晚春写之 篤齋 葉山信果」

の識語があり、いかには信果が散本集本文校訂

に力を尽したかといふ資料にもなるのである
 が、忠順が刊本に奥書を写すに当たっては信
 果の校訂したこの天保十二年の年記を全部削
 除してしまつてゐるのである。これは学者忠
 順として決して決して當を得た處置とは言へない。
 忠順は信果の業績をもつと評価して正しく
 位置づけねばならなかつたのである。次に信
 果の奥書を貼付する。(文献写真其の四)

さて、四冊本の写本校訂の過程についてはいは
 各冊末の奥書と保孝、信果の識語等により明
 らかでこれを整理すると凡そ次の如くになる。

(一) 岡本保孝(寛政九年(1797) | 明治十一年(1878)・

82才没。)がその師極斎所蔵本を写した

が、これは第一巻から第八巻までの本

文であつた。

(二) さらに第九巻と第十巻とは同じく極斎

所持の別本で補訂した。これは(一)(二)

天保二年仲秋のことである。

(三)、葉山信果は、保孝の写本を写し、第九卷以下は同じく校備別本と群書類従本で十卷全巻を校訂した。これは天保十二年の晩春のことであつた。岡本保孝は校備の漢学の方の門下であり、散木集研究について師の学恩を非常に蒙つており、保孝はこの事を識語の中で、「嗚呼徳崇学富儲書亦称焉。保孝生平浴於先生之徳沢有年於茲子孫其勿忘諸し。と校備を賛仰、報恩の情を捧げてゐる。しか

したまた一方信果の業績も決して忘れてはなら
 ない。散木集本文研究はかくして榎齋→保
 孝→信果→忠順と発展する。と
 ところ、刊本の項ですでに述べた如く忠
 順は「シ」に富無泥シの中に於て(一)榎齋所蔵の
 古本をもととして校訂した本の入手のこと。
 (二)類従本その他ニ三本を以て校合したこと。
 (三)野口道直所蔵本と校合したこと。などを
 記している。この中類従本その他ニ三本がい
 かなる本であるかは刈谷図書館にも散木集の

別本は見出せなかつたし、また村上家にもな

い由であるから不明である。次の野口本につ

いては四冊本の末に忠順は墨で次のように書

き入れてある。(文献写真其の五)

「嘉永四年辛亥四月十二日尾張国琵琶島

野口道直本校合了道直通称青物問屋市兵

衛比書入野口本四季部帛モ書モ一様ニシテ

百年前、モノトミユ。祝部以下ハ帛新シ

ク書モ劣シリ。顕昭注一卷ハ帛四季部ニ

似タシド今少シ後ナルベシ。書モ別人ニ

シテイタク方レリ。終ニ文禄三年四月廿
 七日写之。題昭親筆之本也。○寛文十歳
 庚戌卯月十日書写我足軒トアリ。文(禄)の謄写録三
 年ヨリ今茲嘉永四年マデニ百五十七年〇
 寛文庚戌ヨリ嘉永庚戌マデ百八十一年也。
 これによると、忠順は葉山信果写本を入手
 (村上家の「蔵書目録」によると嘉永元年の購
 入の由―築瀬一雄氏調査による)した後に道
 直所蔵本を以て嘉永四年校合してゐるのであ
 る。(こゝは題昭親筆本(写本)で我足軒なる者寛文十年に書写したものだ)

また同じ。	ミ 存 セ ル ヲ 補 へ り し と 欄 外 に 朱 で 記 入 。 刊 本	「 此 一 句 諸 本 ニ ミ 十 腕 タ リ ヒ ト リ 野 口 本 ニ ノ	亦 一 行 空 欠 し と 朱 筆 で 注 し て い る が 、 忠 順 は	こ の 一 句 に つ い て も 、 信 果 の 写 で は 「 塙 本	(二) ま こ と に や の り の は し よ り お ち に け る	あ り 。	人 々 か は ら け 取 て 致 よ み け る に よ め る し の み	本 に は 詞 書 「 お と は に ま か り て 滝 の も と に て
-------	--	--	--	---	--	-------------	--	--

(連 致)

次に野口本にも脱落款があり、その例は左の通り。(詞書も欠脱)

(三)、 難思光仏

人はいさ光のすぢをしるぞともおなじ仏や

しうばしらすゝ (釈教)

右の欠脱について忠順は、四冊本には款の

肩に「ノ口本无」と藍墨で記し、下に墨で「

釈教ニナシ」と注している。三冊本に於ては

「一本无釈教題共闕」とまとめ書いてある。

この款と詞書の欠脱しているのは神宮乙本

・小沢本・岸本本等で、歌のみ欠けているの
は神宮甲本・昌平坂本で、いずれも類従本系
以外の諸本である。この事は(一)・(二)の場合に
ついても同じ。(一)・(二)の歌の存しているのは
類従本以外の書陵部本・小沢本・鳥丸本・大
野本・三手本等の諸本である。野口本も大野
本系統に属することだがこれによつて明らかに
なつてくる。

類従本とそれ以外の多くの諸本との相違点
は、散木集の作品、詞書の脱落の有無により

区別される。例えばその一フに次の

朝

曙に鹿のまぢかく聞えければ

めづらしきによめる

○朝戸あけて立いづる鹿の声きけば跡つかひ

にしきたりけるかな（八月）

の詞書と歌とが類従本では脱落してゐる。

ところが書陵部本・神宮文庫甲乙本・大野本

・三手本・昌平坂本・尚舎本・岸本本・小沢

本の各諸本には凡て存してゐる。四冊本で原

本と言われたいる掖斎所蔵本にもこの一首が

ある。それに巻第九雑部以下を欠脱しているから神宮文庫所蔵本に近い本文を持つものといえるであろう。

忠順は葉山信果の写本をみて信果の群書類従校合のみでは満足せず自らも墨を以て校異を施している。(信果の校合は朱) また保孝、

信果の加えている歌の他集への肩附なども増筆追加をなしている。この段階を四冊本でみ

ると、

保孝(勅撰集)のみ(集附)・(墨書) ↓ 信果(勅

撰十百首(堀河百首・堀河後度百首)・万代集)・(朱書)——↓忠順
 (更にこれらの上に私撰集・類題集・その他
 の歌書との關係を追加、整理をなす)といふよ
 うに展開するのである。三冊本「散木弁譚集
 標注序」(松本奎堂に批正を乞うた時の初稿)
 の中に
 「取共歌載在撰集及諸書者校讐之以録異同」
 と記してゐるのは此の間の経緯を物語るもの
 である。次に四冊本から三冊本への校合の移行状態を左
 の一丁(文献写真)により關係の個所をみてみよう。

以上僅か一丁分りみの例であり、丁によつて勿論校合の多寡はあるが、(本丁は複雑) 要するに三冊本は四冊本を本文校訂用の資料として用い、保孝・信果の校異を検討しつゝ、校番本の一本(古鈔本)類従本に近い本文を中に校合を進めて漸次上欄の注も増加しつゝ、やがて刊本¹散本²欽集³標注⁴の素地を形成していった。尚、刊本成立までに忠順は熊代繁里(本國)、橘冬照(江戸)等に三冊本の稿を送り意見を乞うた。二人の解答書は同じく刈谷園

書館蔵「蓬廬雜鈔」第二十九冊に所收。この
 事については築瀬一雄氏編「碧冲洞叢書」第
 五十七輯「詞花集解」(熊代繁里著)の附録
 として繁里・冬照の「散木集考」二部が翻刻
 されてゐる。これは忠順の質向に府しての二
 人の散木集歌の解釈、考証であつた。これら
 は忠順の標注本に一部とりあげてゐる。(但し、僅
 以上の経過をたどり忠順は広く肉題点があ
 れば人を求め批正を乞ひ、「散木弁歌集標注」
 を完成したのである。

以上主要な「散木集」の写本について述べ
てきたがこの外にも本集の写本は甚だ多い。
これら多くの写本については筆者も目下調
査中で細部にわたっては今後とも研究を継続
せねばならぬが、その写本と所蔵者とを左
にあげておく。

(一) 散木和歌集(一冊) : (二) 散木奇歌集(三冊)
以上二種類は共に遠賀文庫所蔵。

(三) 散木奇歌集(二冊) : (四) 散木奇歌集(一冊)
以上二本は共に石川県立図書館蔵。

(五) 散木奇致集(九册)。(六) 散木奇致集(三册)

以上二本共に京都大学所蔵。

(七) 散木奇致集(三册)。(八) 全名(三册)

以上二本共に竜門文庫所蔵。

(九) 散木奇致集(三册)。(竹柏園所蔵)。(佐々木弘綱翁書写)

(十) 散木奇致集(二册)。(阿波国文庫旧蔵)。(関根慶子氏蔵)

(十一) 俊頼集(二册)。(渋谷虎雄氏蔵)

(十二) 散木和歌集(八册)。(樋口芳麻呂氏蔵)

(十三) 俊頼朝臣詠致鈔(二册)。(彰考館蔵)

(十四) 散木集(二册)。(松野陽一氏蔵)

この外管見に入らない諸本もまだあるだろう。今後の研究に志したい。

諸本の校異などを試みつゝ考えたことであるが、本当は俊賴自身の原款はただ一つの形であつた筈であるのに校訂、校異などを通してみるゝこれまで評述してきた通り諸本により款そのものはもとより、詞書も甚だしく異なつている多くの場に遭遇してきた。俊賴の款を考へる後人違が思わぬさかしらで本文を謄写したこともあろう。これら写本、校合な

どはもとより後からの人達の間で起つたこと
で作者俊頼には全く分かり知り知らぬことであつ
た。それでは俊頼の作つたものとうたはその中
のどれであつたのか。この究明こそが俊頼の
歌に本当に近づくことであり、本文研究を中
心に、しかもよりよき善本を基底として彼自
身のものと、姿をみつけ出すことが歌人俊頼の
本当の研究でなければならぬ。本文研究と同
時に歌人俊頼という文学の世帯りに回歸して後
の一首々々の作品を大印に考えねばならぬのである。